



廣白石叢書

白石先生年譜
考略

是
餘
著
全集
載
年譜

14
588
7





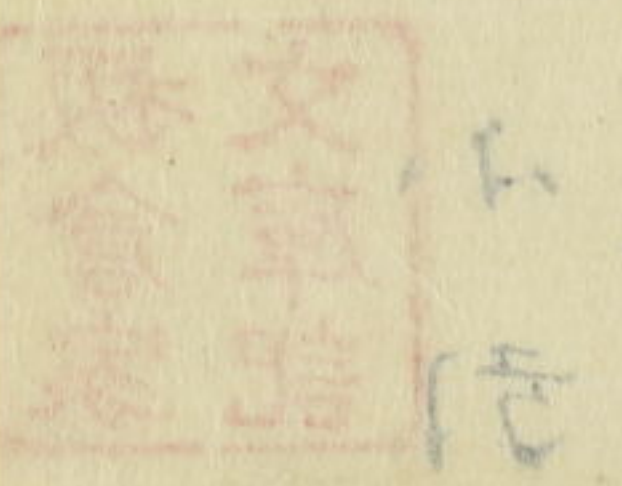
白石先生軍器考
古長文武不偏廢
源先生既以文德
又有軍器考之撰
之其微事之廣而
數茅氏之志言可
垂之來祀無遺憾
于先生之所遣者
則筆之以為

餘小引

板倉家
文庫記



一 卷 命 之 曰 餘 庶 予 卒 先 生 之
餘 葉 以 寄 景 行 之 懷 焉 若 夫 謂
之 一 得 自 矜 十 手 自 誤 則 大 非
不 肖 之 意 也 諸 所 引 據 載 籍 為
目 備 于 左 方 元 文 元 年 丙 辰 夏
六 月 紀 府 末 臣 宇 治 田 忠 卿 謹
書



引書

日夕書記

令義解

儀式

大府記

玉葉

後二條閑白記

顯俊卿記

公敏卿記

續日夕後記

內裏儀式

延喜式

台記

玉葉

兼實公記

公光卿記

親長卿記

明月記
 陽龍記
 兵範記
 愚昧記
 元信記
 世俗淺深秘鈔
 吉部秘訓
 歷吏略
 飾抄
 管見記
 字槐記
 三長記
 兼光記
 教具卿記
 布衣記
 建武二季記
 和名類聚鈔
 次將裝束抄

增鏡
 後撰集
 平家物語
 名長記
 弓馬三秘書
 考工記
 春秋傳
 禮書
 祭儀獨斷
 後拾遺物語
 夫木抄
 長府平家物語
 的要
 尺素往來
 詩經
 文選
 二儀實錄
 宋朝會要

懲恐錄

本州綱目

文永加茂祭繪圖

山東志

舞樂繪圖

文安御即位調度圖

凡六十一部

本朝軍器考餘目錄

卷一 旗幟類

幡訓

羅幡阿禮幡

源氏白旗

卷四 上弓矢類

閑弦

同下

凡貳拾六條

韃

調度懸

笠懸

卷七 矛槍

平鉞 三股鉞

花槍 鎌槍 鎗尾槍

卷八 劔 刀類

頭槌 劔

本陣 鈴太刀 殺目槍

山東志

本陣繪圖

之安御印位調度圖

小倉新六新

本陣 大太刀 殺目槍

卷九 木刀 槍類

卷十 屍鞘 薙鬚懸

軍器 下緒 京行 天皇ノ御時 兵部ノ懸 劔 坂シテ

髪 搥 薙鬚 劔ノ懸 堂ニ至リ 給ヒシ 本陣ニ

火打袋 神夏 儀 媛トイフ 女ノ素 隔ノ建テ 奉

向ニ 懸 尾 平 事ト 見エタリ 此 本陣ニ 此物 神代

卷九 上甲 冑類 代ニヤ 起レル 其 始ハイワタ 詳

十回 鐵甲 本朝ノ俗 旌旗 詭テ 及太ト云ット 迄ト

同下甲

卷拾字甲書燧

烏帽子

鏡直齒

卷十一帷幕類

敷皮

卷十二鞍轡類

唐鞍

同次文 同次文

本朝軍器考餘

卷一旗幟類

幡訓

軍器考曰景行天皇ノ御時筑紫ノ熊襲カ叛シテ
 伐ルヘシトテ周芳ノ婆摩ニ至リ給ヒシホトニ
 此國ノ魁師ヒトノカミ神夏磯媛ヒメトイフ女ノ素幡シラハタヲ建テ参
 向キシトイフ事モ見エタリ紀日本サレハ此物神代
 ニヤ始ル又人ノ代ニヤ起レル其始ハイマタ詳
 ナラスカ本朝ノ俗ナラシ旌旗ヒイキ讀テ波ハク太ト云コト波ト

卷一

貞丈云旗ノ手ト云物ハ別
 二作リ添ルニテラス即
 旗ノ幅ノスソノカヲキト
 云也風ニヒラメキマ子クモ
 ノナル故ニ手ト云ナリ
 後代ハ乳付旗ノ上ニ
 羊幅ノ巾ヲ付テコレヲ
 手ト云コレモ前ニ同シ
 也旗ノスソノ手ト云ニ
 アラス母夜ノ手シツマル
 コソナキト去乎記ニ見タ
 ルハ母夜ノスソ也

ハ長キ義ナリ太トハ手也手ノ長クカ、リタレ
 ハ波太ト云へリト萬葉集注ニハ見エタリ

志卿 按スルニ旌旗読テ波太ト云フ波トハ長

キ義也太トハ手也ト注セル所ノ萬葉集注ノ

説イカ、アルへキ手ノ長クカ、リタルヲ幡

ト云シニハ延喜式ニ見エタル阿礼幡ト云フ

物手ト云ニ長キ物ニナケレハ此訓義是非ヲ

ホツカナシサレハ手ナキ幡ナリ也相假借ノ

波太ト云ニモイタクハ差ヒ侍ラジ猶又萬葉集

注ト云フ物イマタ見サレハ其説ノ如クナル

へキ軟サレ也或説ニ幡ノ訓ハ籒也籒俗ニハ

ヒレト云物ナリソレ魚ハ静ナル時ハヒレヲ

ヲサメ動ク時ハヒレヲ建テ風波ヲ厭ハテス

ミヤカニ行ク物ナリ此籒ノ訓ヲ借テ幡ヲ波

太ト云トソ此説モシ其義ニ叶ヒ叶ハサル事

ハ能シレル人ニ尋ヌヘキ事ニヤ猶推シ考ル

ニ籒トハ我國ニ於テ莫ノ事ニ用ヒ既ニ日本

書紀ニ海ニ籒シカハ則籒廣籒狭ヲ云ヒ狭ト

ウチハラニカヒ

ヒロモノサモノ

廣トハ大莫ト

貞丈按日本記ニ釣ト
 アルヲ船ノフトレ釣ト
 職トスル事ヲ穿鑿ノ
 説ナリル日本記ヲ直ニ
 ノ者皆其本文ヲ直ニ
 説スレテ註ヲ解クカ
 如クニ強テ穿鑿シテ
 義理ヲ未ルハ善ク説者
 ニアラス

ハハ小魚ヲト見ユ又火火出見尊兄ノ火酢苜命
 云フヨシト見ユ又火火出見尊兄ノ火酢苜命
 ニ釣釣ヲ借テ失ヒ給フヲ兄ノ命其釣ヲカヘ
 サニ事ヲ賣ル出見尊其釣ヲ求ル術鹽筒老翁
 ニ問ヒ給ヒシカハ對ヘ計マウシテ海神ノ夕
 クレタル馬ハ八尋ノ鰐ナリコレ其鰐背ヲ豎
 テ插小戸ニ在リト見タルハ古書ノテイ船ヲ
 鰐ト書キナシテ又其船職ゴトキアリイマヲ
 モ鰐ヲモテ形容メカキ給フナルヘシオレハ
 幡鰐同訓ナルトシラレ侍ルニヤ再ヒ和名類

聚鈔ニ併セ考クルニ考工記ヲ引テ幡ハ音翻
 和名波太旌旗之惣名也ト又文選ノ注ヲ引テ
 幡ハ音耆和名波太トアルニコレハ幡鰐相通
 テ擬訓ナリト云ンモ便リアルヘキニヤ亦幡
 ハ伊弉册尊ヲ祭ル時ニ始テ見エ鰐ハ月読尊
 保食神ノ御モトヘ向ヒ給ヒシ時ニ見エソメ
 タレハ後ヲモテ前ハ義ニアテハ用ヒン事然
 ルヘカラスト云ハハ伊弉册尊崩シ給ヒシ時既ニ
 日月ノ神マシマセハ其時ノ程モイタタハ隔

侍ラシ強テ云ハ、伊弉諾伊弉册ノ二尊大
 ハ洲ヲ生給ヒ天次ニ海ヲ生給フ海アラニカ
 ラニハ其籍モ何リナクテハアラサルヘキ
 羅幡阿禮幡
 軍器考曰又大射ノ時羅幡阿禮幡ト建ラル
 事アリ式延喜

按スルニ天子御位ニ即セ給フ時建ラル處
 ノ鳥形日像朱雀青龍白虎玄武ヲラシラ幡隊幡鷹形
 鷲形等ノ幡ハ或ハ其明ヲ責ヒ或ハ其性質ヲ

貞丈云

延喜兵庫家式曰凡六
 射建羅幡者烏羅十二
 旒々則張寸二採着鈴三
 口帛巾二條旒六條長八尺
 廣阿禮幡十二旒各有
 柄花一葉色次深淺次雜
 注以綠次黃次淡綠右者
 此花槍二十口幡下旒々
 別着柄建共部及人等
 預前十日移送兵部
 木ノ寮射殿之前量生
 歩數便建標机當日雙
 明列建羅幡訖即返上

表シ猛悍ノ義ヲ取テ備エ用ヒラル、ニヤ其
 理コトナリハイマダ知ラズ此條羅幡及ヒ阿禮幡ノ号
 ヲ舉テカラ其用ヲ記シ給ハヌ事ハ定メテユ
 エコソ有テメナレヒアルカ中ニ其理ノモレ
 又ルヲ奉意ナクヲモヒテ見ル處ノ有ニ任セ
 試ニコレヲ解クニ羅ノ幡ハ大射ノ地ノ標ニ
 用ヒ阿禮幡ト云フハ矢ノ中レルヲ指ヲシフ
 ルノ幡ナルヘシ其アタリノ疎密ニ随ヒテカネ鉦
 ヲ叩ウツコト敷アリ皮ニ中アタレハ旗ヲモテ指示ト

自文撰アレハタト云ハ
アリハタノ轉語ナルハ
シアリハタト云ハ
タリハタノ思語ナル
ハシ

見エタリ 内表マタ 阿礼ト云フ幡ノ名ハイカ
ナル意ニヤ凡本朝ノ俗ニソノ物ヲ指テ阿礼
ト云フ是ヲ歴史略ニ考フレハ神世文字ナシ
阿礼ト云人口授セリト見エソレハ物ヲ指シ
ヲシフルヲ阿礼ト云フカ此ニモトヅイテ大
射ノ阿礼幡ノ義ヲ古今推通メ考フルニ室町
殿ノ此ニヤ名長記ノ法ヲ取テ命メ的ノ式ヲ
撰セラレシ的の要ト云書ヲ見ルニ四方ニ建ル
幡十二本長八尺廣八寸六流ハ縹六流ハ緋上

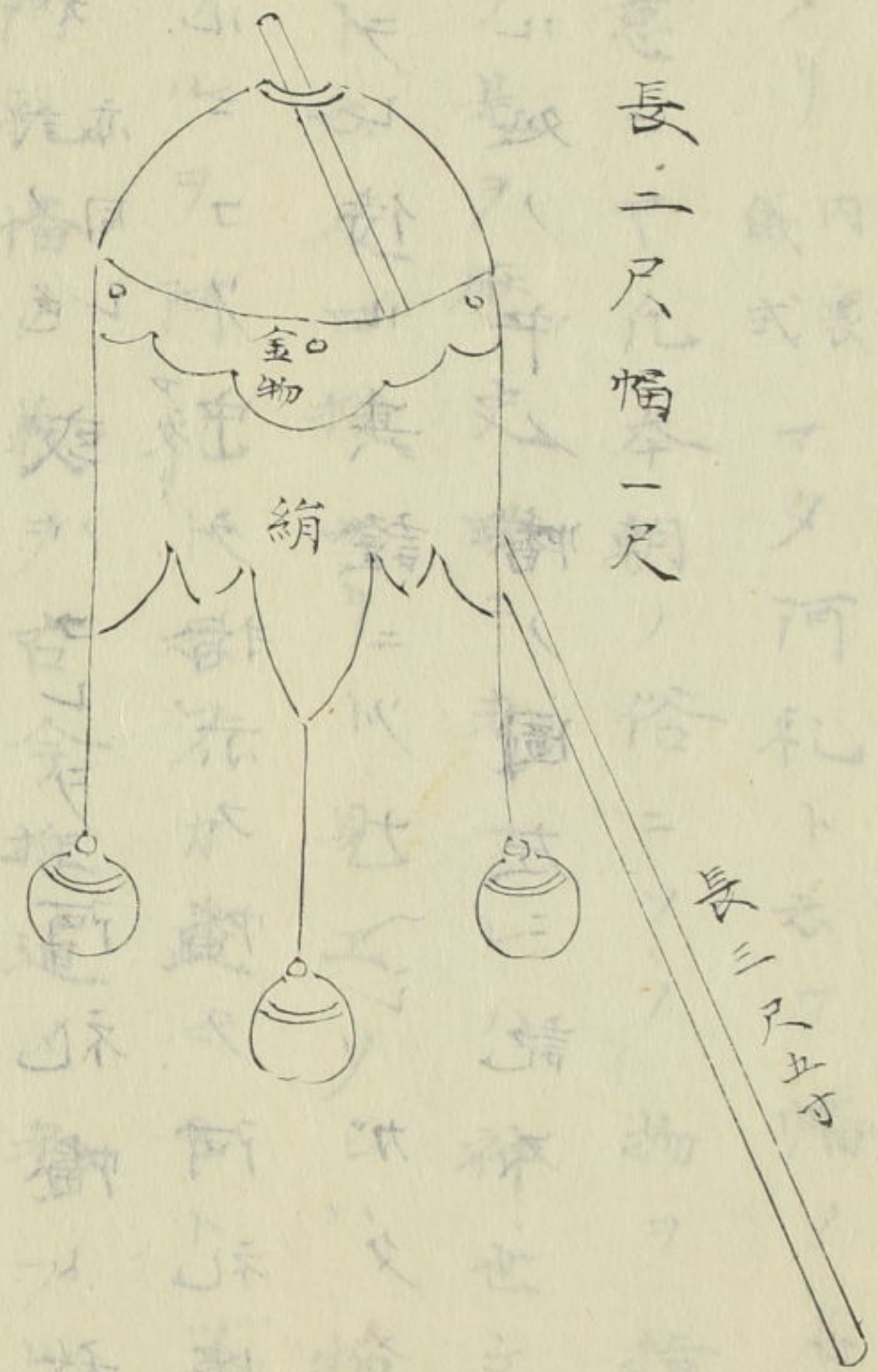
貞丈云的要ト云書ハ
未曾見此條ニ引ク所ヲ
趣ヲ見ルニ疑シキ書也
室町殿ノ時行ハレシ的
ノ式ハ專武田小笠原ノ家
ニ傳タル式ヲ用ラレ也
其代ノ書ヲ見テ知シ
的の要ト云書ヲ撰ハレシ
ト云フモ的の要ノ式ヲ用
ラレシ事モ其代ノ書ニ
見ル所無之可疑難信

二 鈴口ヲ付ク 今按スルニ延喜兵庫式ニ見ル処ノ羅幡ナルハ但シ式
二 紫 中ノ旗十二本 左ノ第一ハ紫色次ニ深
緑次ニ緋次ニ緑次ニ黄次ニ浅緑 右ノ方コレ
ニ准ス 亦式ノ色 或ハコレヲ阿礼幡ト称スト見
エタルニコソ中ヲ指示ス幡ヲ阿礼幡ト云フ
事知ラレ侍ル其證ニソナヘシガタメ的の要ニ
見エル処ノ中ノ幡ノ圖左ニ記ス

ハ赤キ色 唐澤八幡殿ノ式ニハ白キ色ヲ拵クハ
見エル所ニハ赤キ色ヲ拵クハ見エル所ニハ赤キ色ヲ拵クハ

軍器考曰源氏ハ白ハ夕トイフ物ハ始又世ニ傳

源氏白旗



長二尺幅一尺

長三尺

フル処其説多シテノノ微トスヘキ事ハ少シ或
ハ其家ノ祖中務卿真純親王ニ大將軍ノ宣旨ヲ
ナサレテ月華門混白ノ幡ヲ賜リシヨリ事起レ
リ云ヒ新幕或ハ昔將軍ニ命シテ出征サシ
メラル、時御旗ヲ賜フ事アリ其中ニ手長白旗
トイフアルヲ源氏ノ祖ニ賜ヒシヨリ子孫其色
ヲ用ヒラレシトモ云也略源平盛衰記ニハ平家
ハ赤キ色ヲ捧クハ幡殿ノ家ニハ白キ色ヲ捧ク刑
部殿ノ家ニ黒キ色ヲ捧クナト云落書ノ事見エタ

貞大按
刑部丞義光三非
大刑部卿志盛也平
家物語長門幸三見
たり

リ刑部殿ト云レハ義家朝臣ノ舎弟刑部丞源義
光ノ事ナルヘシサラハ又源氏ノ旌旗其色皆白
カリシニモアラスカクサダカナラ又事ナレド
源氏白ハタノ用ヒシ事ノ由ハ猶也ニ傳フル処
モアリキ

按スルニ白幡ハ源氏ニ限りテ用フヘキ證文
ノ始ハイヨクシレラニ所ニアラスサレドモ
本文刑部殿ノ家ハ黒色ヲ捧ナト云フ事ニ細
ハシラサレトモモシ家嫡ノ色ヲ憚リテ我家

軍ノ色ヲ替ク變給ヒスルカ然レバ家ノ色ハ本
ヨリ定リアルカ落書ノ外ニハカクノコトキ
事見アタラズナラ以外源家ニ他ノ色ヲ用ヒ
タル事モアルマシキナレハ亦本文ニ源氏ノ
旌旗其色皆白カリシニモアラスサタカナラ
又事ト見エシハ聊イフカシキ説ニヤ謂フニ
源家ハ白色ノ綾ノ旗ヲ用ヒ来リ給ヒシ事ヲ
ルクヨリ定リシ事ニヤ續拾遺物語ニハ武將
ト見エテ白綾ノ旗ノ、ノイタルハ義家朝臣

ト見エシモカシコシトアリ又兼實公月輪ノ
記ハ蔵人行網云當家先祖ヨリ白綾無文ノ
旗ヲ以テ來レリ致下御幕ノ綾行網申シ給ル
ヘシトモ見エタレハ既ニ行網ノ詞ニ當家先
祖ヨリ用ヒ來ルト云フナレハ白色モ千ロン
欲サテハ尋常ノ絹ニモアラズ統拾遺并ビニ
殿下ノ記共ニ綾ナルト見ツル
卷四上弓矢類
関弦

軍器考曰又俗ニ関弦ト書クハアシカラシ禦弦
トカク由ハイカ、アルヘキ異朝ニテハ弓ニ矢
ハケルヲ関トイヘハ孟子左傳 関ノ字借用フ
ルソノ縁アルニハシカン
按スルニ関弦ノ文字ハ實ニカナヒ禦弦ノ字
ハ屈曲ノ説トモ云フヘキニヤサレトモ此ニ
ノ説ノ中ニ関ノ字ヲ用ヒヨトハ是ニシテ弓
ニ矢ハケルヲ以テノユヘニ関ノ字ヨロシカ
ルヘシトハ若ハ非ナランカ孟子左傳ヲ引カ

貞丈母
関弦ト云物二品也一ハ弦
ヲ糸ニテ巻クヲ弦ヲセクト
云一ハ伊勢ノ関ト云所ノ名
産ヲ云ナリ貞丈母足利殿
時代ニ記シケルヲ書ニ日置
流法要録抄ト云書一卷ア
リ其書ニ曰シノノセキツル
トイフ其射シメタルツルヲ
セキタルヲイフ也射シメ
クルヲナラ也ハセクマシキ
也マシ是ハ伊勢國ノ関ヨ
リ出ル弦ヲ云フニハアラ
ス

ル、トイヘトモヲニ矢ハケルヲ関ト云フナ
レハ弦ノ一名ニ取用ヒテモ極メカタカラシ
此物ヲ考ルニ関弦ト云フハ其弦ヲ調ル地ノ
名ナルヘシサレハ北畠教其記伊勢ノ國司
ヲ見ルニ軍陣ノ弦一袋十二右當國関之産物
也トアルニヨレハ伊勢國関ト云フ所ノ産業
ノ弦ナルヘキカ猶マタ後成恩寺殿ノ書サセ
給ヒレ正坂弦関弦ヲ作り懸ケ都合百張トモ
見ユタレハ尺素今ノ也モ皆人ノ知リスル坂

同上
取人尺寸等合ユフクレノ山ノ
ハミレハ松坂ヤツルツルトコソ
月ハ出ケル約ノ詞云右松坂
ヤツルトハワキタルトツルノ
ノ詞タノ調セト按之ニ坂弦
ハ松坂ニテヤ作り出シテム

下及ニ関ト云ニタ町ニ律弦ヲ制リタル其関ト
云フ所ノ弦ヲ関弦ト云フナルハ
同律ノ弦ヲ用テハ其律ノ
軍器考曰神ノ代ノムカシヨリ鞠ニハカナラズ
繪カク物ニヤマサシキ物ヲハイマタ見子ト迄
キ此太神宮ニ進ラセラレシ御鞠ノ圖ヲハ見ハ
クヲ得タリキソノ形モソノ繪カキシ物モ共ニ
世ニ云フ鞠繪トイフ物ニカ似テケリ
世ニ云フ物ニト云物

水々ウツスクイ形ヲ
ナリサレトモ古キ物ニハ皆鞆繪ヲシルセリ但
シ吉部秘訓ニ圖セシ所ハ鞆式ニ見エシ兵庫寮
繪カキシモノニハアラフス
ニテ作り進ラセシ御鞆ニ熊ノ皮ニテ作レル物
ナリサレハ此物ハ熊麻苧ノ皮ヲモテ作ル
其中ヲ虚ニスルナレハ弓弦觸ル毎ニ其音アリ
萬葉集ノ歌ニ大夫乃鞆乃音為奈利ナトヨミ
シモ此事トノ見エタル
柄スルニ凡鞆ノ考ヘラル、處太神宮ノ御鞆
イ事アアケラレ又兵庫式ノ所見ニ依テ其説

マコトニソナハルトイヘトモ太神宮ノ御鞆
ノ形モ其繪カキシ物モ共ニ巴ノ如クナル物
ナリトハカリ有テ神宝ニ用フル鞆ハ其形モ
征器ニ堪スト云フ事ノ理ヲモノコシ或ハ式
ヲ引テ鞆ノ其中虚ナルユヘテ弦フル、毎ニ
其音アリト注シ給ヒキ是神宝ノ鞆ノ形其中
ウツホナルヲ見テ兵庫寮ノ式ニ見エシ征器
ノ鞆ノ形ヲ解ラ萬葉集ノ歌ヲモ引給ヘリ上
古ノ事ハ猶詳カナル事ヲ得ストイヘトモニツ

負大云神室ノ鞆古ハ麻皮ニテ作ル由延喜式ニ見タレ共後世ニ至テハ木ヲ割テ作ルナリ明和八年ニ伊勢ノ宮造空アリシニ久志奉左京度會常カ伊勢國ニ詣テ神車ヲ司リシニ神室トモヲ并見シタリシ由詠ルニ付テ鞆ノ事ヲ尋問シニ木ニテ作タル物ニテ頭丸ク上平ニシテ一方ニ細ク曲リタル手付テ形巴字ノ如シ黒塗テ銀彩ニテ鞆繪ヲ兩方ニ畫タル物也ト答タリキ古ノ製ニ違タリ今ハ鞆張ノエモ

ノ義ヲ才モヒ合セテ延喜以來ノ鞆ヲ制ハ神室征器其形拾別ナルニヨリ現ニ見給ヒシ太

神宮ノ御鞆ノ事延喜神祇式ニ載ル処鞆二十

四枚 以麻皮ヲ縫之 胡粉塗テ以墨畫之 納檜麻笥ニ合一徑一尺六寸五分 深一尺四寸五分

マ夕兵庫式ニハ熊草一條 鞆料長九寸 廣五寸 牛草一條

寸廣一尺 漆一合九勺二撮 鞆料 生ノ絲小二

西一分 縷ノ箭縫 鞆袋料紫表緋裏帛各一條 各長二尺

三寸廣 鞆緒紫組一條 長二尺 ト見エタルコ

尺一寸 鞆 神室ハ麻皮ニ胡粉ヲ施シテ墨ニテ畫キ檜

ナケレハ麻皮ニテ造ル事モナラサルエ其カタハアリテ木ニテ造レルナレハ又古ハ白ク塗テ黒ク繪ヲ画タリ今ハ黒ク塗テ白ク繪ヲ画ク是又古今相違ナリ

ノ麻笥ニ納ル征器ノ鞆ハ熊ノ草ニテ制リ臂

ニ通スル處牛草ノ手ヲツケテ紫緋ノ帛ノモ

テ袋ヲトメノ入ル処ヲ見レハ體モ用モ夕

カヒタルカ近代伊勢造營ノ度コトニ行幸官

ヨリ調進スル神室ノ鞆ハ其カタチ窪塚ノ如

クニシテ巴ヲ繪カキシモノナリ又攝津國住

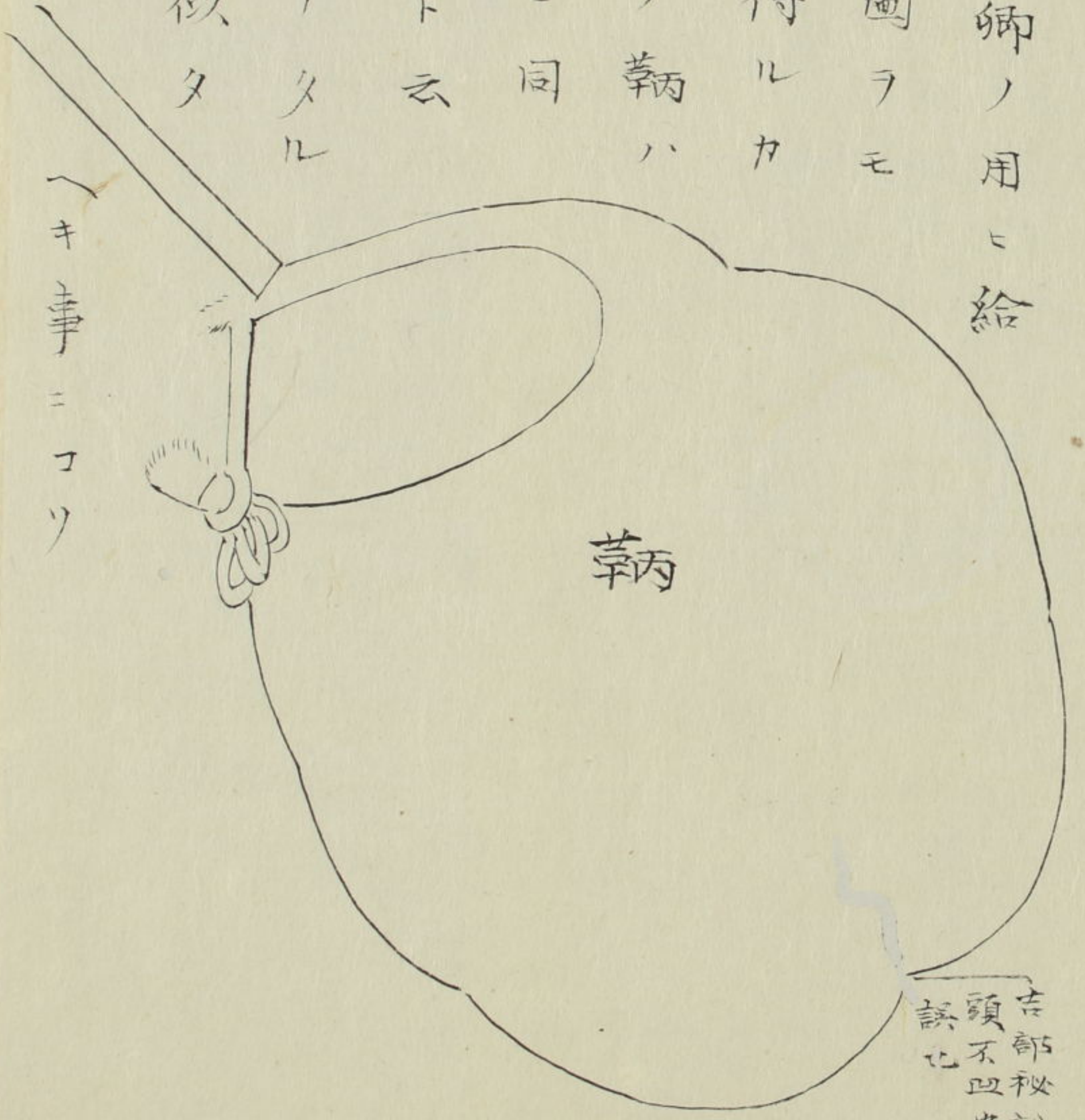
吉ノ神室ノ鞆ト云物其形コレニ等シ近キ也

左射礼者流上各乘テ鞆ノ事ヲ教フルニ凡ハ

此神室ノ形ヲ以テ是カ説ヲ大スニヤ今コノ人

軍器考モ神宝并ニ征戦ノ鞆ヲワカチナガラ
 注スルニ神宝ノ鞆ヲ以テ征器ニアツルカユ
 一ニ神代ノ昔ヨリ鞆ニハ必ス繪カク物ニヤ
 トモ疑ヒ或ハ其中虚ニスルナレハ弓弦フル
 ル毎ニ其音アリト云ヒ或ハ吉部秘訓ニ圖ニ
 シ処ハ鞆繪カキ物ニハアラスト書シ給フ
 ナリ又モ一ラク兵庫寮ノ式ニ見エタル鞆ノ
 寸法又以テ吉部秘訓ノ圖ノ如ク制ルトキハ
 征器ノ鞆ヲ口フ口備ト云フ一キニヤ猶マ夕

藤原経房卿ノ用ニ給
 ヒシ鞆ノ圖ヲモ
 左ニノセ侍ルカ
 クテ神宝ノ鞆ハ
 征器ノ鞆ニ同
 シカラスト云
 ニハ獨知リタル
 ト云フニ似タ
 レハ猶尋



吉部秘訓之圖
 頭不四也此圖
 誤也

一キ事ニコソ

調度懸

軍器考曰又此役ハ將軍ノ御弓箭ヲ帶タル事也
トシル事ハカノ建久元年十一月七日入洛ノ日
錦倉殿ニツカラ弓箭ヲ帶シ給ヒシカハ此役ニ
候スル人ヲ具セラル、ニ及ハス同九日院參ノ
日ハ直衣ニテ參ラレシカハ右馬允時經ニ入浴
ノカメサレシ水予ヲ賜リテカノミツカラ帶シ
給ヒシ所ノ弓箭ヲ帶シテケリ

貞丈按
東鑑ニ建久ヨリ以前養
和二年正月三日ノ記文ニ調
度懸見タリ

ノ如ク注サレテ其後ノ代ニハ數多見エタル
事ヲモ又漏シ給フ事ハ其謂コソ有ケメサレ
トモ調度懸ノ名ヨツテ来ル事ノ古ルケレハ
考フル処ヲ書スニ宇治左大臣殿瀧口ノ調度
懸十人ヲ具セラレシハ康治元年ノ事ナリ是
ヲ管見記ニ瀧口調度懸十人
シルサレテ殊ニ出立作法等懸ク見エタリ猶
是ヨリ前寛治元年ノ太府記ニハ調度懸具ス
ル莫例ノ如シト見エタリ此條將軍ノ弓箭ヲ

貞丈按百練抄建久五
年四月十七日關白賀茂
詣行列之條云同調度懸
八人評禮燈花上下件裝
束調度等實首給之

或黃袴衣袴也ト
俗呼テ曰レ權ト也

帯ル者ヨヨク調度懸ト云フナル事ヲ注シ給
ヒ又其後ニ候スル者モ一人ニ限ルヤウニ聞
エシトモ建久元年錦倉殿入浴ノ前ニモ平
治元年殿下ノ調度掛十二人信範壽永元年攝政
調度懸十二人紀入浴ノ後ニモ建曆二年ノ顯
俊卿ノ記仁治三年ノ公光卿ノ記マ夕陽龍記
寛元四年ノ記等皆調度懸十人ト見エタレハ
一人ノ役ト思ヒヨラヌモ便リアルヘキ歟
レハ公家ノ調度カケハ人ノ數モ多ク武家ハ

一人ニ限リ數定リタルトモアルニヤ猶本
ヲ見ルニ十一月九日錄クテ殿院參ノ日石馬
元時經御調度ヲカケ其次ニ布衣侍六人宇津
宮左衛門尉朝綱八田右衛門尉知家工藤左衛
門尉祕經畠山次郎重忠梶原平三景時三浦十
郎義連各調度懸ヲ具スト見エタレコソ是則
調度カケノ從者ヲ侍タルモノモ相具スルノ
文ナルヘケルハ武家ニモ其數ハアリケリナ
レトモ此調度掛ハ烏帽子掛ク事ト注サレテ

貞丈撰
又攝將軍ナラヌ人モ調
度掛具スルモ兼攝將軍
元服記ニ永享二年七月廿
五日大將特實ノ行列ノ記
タルニ執權左内佐兼淳
僮僅之次茅重一人掛
調度掛一人録貞ト見タ
リ胡録ハ最フニナルハ
シ又亦松伊赤寺調度
掛具シタル事左ニ記ス

武家將軍家ニテ將軍ノ
御調度ノ掛テ供奉スル役人ハ
唯一人ニ限ル也移ノ調度ヲ掛
テ供奉スル人ハ數人ト限ラ
ヌ也公家ニハ主君ノ調度ヲ
掛ルモナシ隨身等私ノ調
度モ仍數人者之武家ニテモ
私ノ調度ノ掛ルハ數人者
一人ニ限ラス御調度掛ト云テ
御ノ奉命ルハ將軍ノ御トラシ
ノテ久ヲ帶スル役也且、唯
一人ナリ

貞文松發教將軍元服記ニ
赤松伊予守後雅カ即從之
行極ヲ記シ

正ホシノ緒ヲシテウツカケトモ
正ホシカケトモ云宗五記其
外右キ物ニ見タリソレ本
字頭頭掛ナリ詞同キ正調
度掛ノ字ヲモ用也調度ヲテ
ウツトモ云ナリ

弓箭ヲ持ツ事ニ注シ給ハヌハ亦テウツ掛ナ
ト云フ臆説トモ云ンガ如キ名ニヨリテ調度
掛ト云フハ大将ヲ外ニハ具スル莫ナシト思
ヒ決テ給ヒヌルカコノユヘニ主人ミツカラ
弓持給ハヌ時ハ從者必ス持ツヘキ事ノ由ヲ
鎌倉殿入浴ノ日兵衛院參ノ時ノ調度懸ノ有無
ニテ極テ思ヒアキラメ給フト注サレタリサ
レハ烏帽子掛ト云ヒ又テウツ掛ト云フ莫ハ
イマタソノ実ヲ知ラス尋極ムヘキ事ニコソ

テ曰儀ハ掛ノ直ニ銀箔ニテ
紋ヲ押ノ皆調度掛手蓋ソナ
又キ任先規カト見エタリ右赤
松或雅子時侍所ナリレニヨリ
テ調度掛ヲ具シケルナリ

サレヒ大将ニカギラス侍モ調度懸ヲ召具ス
ルヲ見及ヒタル莫ハ永仁三年八月、比齋麻
越前守助成ガ宿所ニオイテ有識ノ輩參會シ
テ北面藏口判官以下出仕進退ノ事ヲ連署シ
テ故實ニマカセテ定メ置ケルニモ主人矢ノ
負ヒ弓持事ナシ調度懸是ヲ持ト見エタレハ
布衣 此式ニ極リタルニコソ亦調度ノ掛ケ様
ハ所傳モアル莫ノ由是ヲ管見記ニノセタル
記 文ト文永賀茂祭ノ畫圖ト云フモノ一卷有

ヲ佐セ考フルニ祭ノ繪調度ノ掛ケ様符合ス
 ルカト思ハルニヨリテソレヲ左ニ寫ス



貞丈云胸ニ在ハ弦卷ニアラス
 金環也布衣記ヲ見ルレ弦卷
 ヲ肩ニモ夕セトアリ宇槐記ニ
 弦卷ヲ胸ニアテトアリ猶可
 考之

笠懸

軍器考曰笠懸ノ的ハ檜木、厚サ五六分ナルヲ裏
 板トナシテ表ヲハ牛、草ヲ張りテ草ト板トノ間
 ニ綿ヲ入ル大サハ徑一尺八寸繪カ、ムヤウハ
 中ニ當ル所ヲ黒クス但シ是ヲハ鴛トハイハス
 連錢トイフ也

按スルニ笠懸ノ的ノ式ヲ舉ゲ猶本文ニモ笠
 カケノ本根ハ田村磨ニ初リヌル事ヲ諏訪ノ
 御縁起ヲ引テ書シ給ニマタ也下リテハ鎌倉

貞丈按軍器考ニ諏訪ノ御縁
 起ヲ引テ笠懸ノ事ヲ記セリ然
 トモ彼縁起ヲ見レニ笠カケニア
 ラスヤフサメトアリ

貞丈抄
弓馬三秘書ハ此三篇ノ組合テ
往年板行シタリ三秘書ト
名付レ所ナリ今ハ其板絶リ
三篇ノ内高忠圖書ト道春空排
圖書ハ正レキ古書也小林ノ圖書
ハ疑レキモノナリ取レ足ラス其書
名富士牧行日記ト云書ノ終ニ建
久四年六月二十日伊豆國田中住
人小林中務少輔ト記セリ其書
中御鏡大將見タリ建久ノ比
ハ手鉾ハアリタレバ鏡ト云物
ナシ鏡ノ字ミイナク出来ス其
比ノ符ハ弓矢ノミヲ用ヒ鏡ヲ

右大將家ヲ以テ中興ト見ルノ文意欽サレバ
軍器考ノ如ク笠懸ノ式ノ定リタル莫ハ頼朝
卿以來ノ制ナルヘシ是ヲ思フニ鎌倉殿ノ時
ヨリ始リタリシ證文モアルニヤモシ據トコ
口ハ弓馬三秘書
伊豆國田中住人小林中務少
輔覺書一冊多賀堂後守圖書
一冊源大藏少輔道春家記一冊
ト名ツクル書
合テ弓馬三秘書トイフナリ
アリソレカ中ニ笠懸ノヲコリノ事道春ノ家
記ニ見ユル処ハ遠笠カケ始ノ莫右大將家ノ
御時モ口モ口ノ作り物品々極メラレキ中ニ

用ルノナカリシ也是ニテ
其偽書ナルヲ知ヘシ

モ遠笠カケ此御代ヨリ始マレリトアリテ其
式ヲモ載タリサレハコレニヨリテ極リタ
ル式ハカリヲ舉ニ其先キヨハモラシ置給ヒ
タレカ比モノ右大將家治世ノ前ヨリ久シク
見エ来リタル物ニテコソ有ツラヌ其證ニハ
寛治六年二月八日中辰時許於加河多河原暫
留御馬前駟皆下自馬候左右是為御覽義細朝
臣武士也一々騎馬渡レ之廿人中中位下十人
射笠懸之由武士中能射一人為射笠懸又渡南

貞丈抄
寛治六年云是中右
記之文也本文悅中右
記日之四字

中右記曰

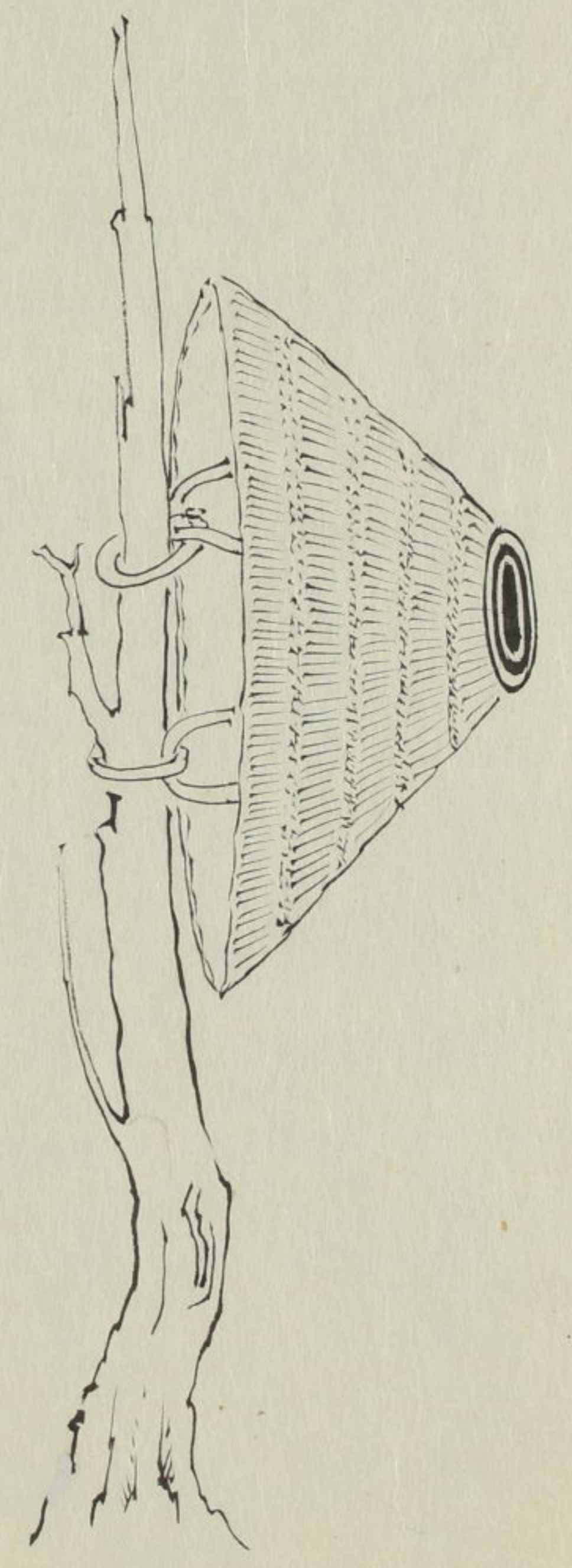
自南渡北仰下可

形容甚美顔色不變萬人感之次立の之後射之
已中の中心傳、藝由藝見者如堵塙上中下莫不感賀
彼間武士名兼貞字進藤又後二條殿下記モコ
レ同シルノ如ク見タレハ古シヨリ有リ
来リクル事ニコロサレトモ其起ル所ハイマ
夕考ヘス筈懸ト之フ名ハ源大藏少輔ノ記ニ
モ左衛門督殿御時御將ノ次ハ竹笠ヲカケ
テアソハシテ後ニ遠筈懸ト改メ名ツケラレ
タリ始ハ的ニ何ヲモ時ニ随テ用ヒケルナリ

狩帰ノハヤマノ麓ナトニ野筋ノスノナル所
ニムラカリヒカヘタル射手トモカカハツチ
ノ駒馬共ノ乘ハシ仕立テ、響ニ黄ナル冷カニ
出サセタルヲ引ヲリタテ、ハシラカシ筈矢
ニ指タル竹ノ根ノ引目ニテ的ニ立タル扇ノ
繪ノ白キ処黒キ処ヲサシテ射ケルナリト書
レハ昔ハ的ノ式定リタル事ニモナカリシニ
ヤ又名長記ニハ筈カケト申候ハ高キ物ヲ射
習ヒマウス替昔古ニハ一ル也ト見エタルハ高

貞丈持右ノ説ニヨレハ
 上右ハ此因ノ如ク笠ヲ
 掛ラ射始ラレ後ニハ笠ノ
 代ニ扇ナトヲ掛テ射レテ
 モ本ノ名ニヨリテ笠掛
 ト云ヒシナルヘシ

キ此ニ笠ヲ掛置キテ射レ夏ニヤ鹽川伯耆守
 ニ上代ノ圖ノ古キ笠的ノアリシヲ多田越守
 守摸シヲキタル繪圖九ノ如シ



卷七 矛槍類

平鉞 三股鉞

軍器考曰又平鉞三股鉞ナト今ノ物モ見エタリ
 按スルニ平鉞ハ字義ヲ以テ推シ量ラムニハ
 形ヲ乎カニ中人志乃岐モナキヲモテ其名ヲ
 得タルカサレトモ證文モ見ル処ナレハ唯
 強テ云フハ又三股鉞ト云フ物モイカナル
 物ニヤ是モ今ノ世ニ見ル三股アル鉞ト云フ
 モノ俗ニ十文字モ口カキナト云フ物ニヤ其

卷七

國ニモフ処ノ商^{シウ}牙^カ牙^カノ類ニヤサレト
 モ此モノ兩旁ニ^{フカ}勾^カリ出タル又ハ皆下ニタレ
 吾朝ニテハ新ナル制ニモ見及ハズ異國ニ
 戦トモ棘トモ云フ物アリ春秋傳ニ云フ子都
 拔棘ト云フハスナハチ戟ノ事ニシテコノ物
 三股アリ中ノホコハ直ニトカリテ長ク一
 股援ト名スル処ハ上ニ折テ中ノホコ先ヲ
 リハ長キ莫少シクオクレ又一旁ノ胡ト云フ
 物ハ下ニ折テ援ヨリハ短シ此形ヲ古今ニ考

フルニ今云フ^{カキヤリ}鈎^{ヤリ}ナト云フ物ニ似テ其股ハ
 三アリサレトモ兩旁ハ上下ニ折^{クサケ}ワカレタレ
 ハ三股鉞ノ類ト云ンモイカ、アルヘキ本朝
 ニ見エル所ハ管見記ニ天仁元年ノ江記御^{コケイ}襖
 ノ篇ヲ引テ節旗^{騎馬者持之}之件、旗上三股鉞^{緋綱、四人張}如^山字ト
 見エタレハ三股鉞ノ形ノヨリ所ニハ便リモ
 アリナントコロ思ヒヨリス亦文安ノ度ノ御
 即位調度ノ圖ニハ三股トイハム^{タホコ}幢^アマタア
 リ中ニモ万歳ノ文字カキシ幢ハ三股ト云ン

貞丈按
 文安ノ度ハ誤ナリ文安年
 中ニ即位毎之カノ即位調度
 圖ハ文安年中ニ字タルヲ彼
 圖ノ外題ニ文安ノニ字ヲ置
 タルニ文安ニ即位アリシ
 ヤウニ関ユルナリ

物カ人々モ見シレル物ユハ圖ニハ及ハサル
ナリサレトモ是等ハ旗ユツエタル鋒ナレハ
猶タツヌハキ事ニヤ

花槍ハナホコ鎌槍カマホコ鎧尾槍ヨロイオシ

軍器考曰花槍延喜式鎌槍鎧尾槍三代之ニ物ノ制

ハイカニヤアルラム義解ノ注セシ所ヲ見ルニ
戈ノ屬也トハアレト木ノ兩頭銳キモノトシル
サレタレハ又ヲ施セシ物トモ見エス

按スルニ花槍ト云フハイカナル物ニヤ鎧尾

ノ槍ホコト云フハ形ハ知ラズサレトモ鎧尾
ノ太カト云フ物ハ伏見院御宇ニテ見エシ
莫クアレハ太カ鋒ノ條ニ注ルニ注ケズ此ニ
モ又ニツク槍ホコ其形ハ考フル処モナクサレトモ槍
ノ字ニ付テ聊思フ処モアレハ並テ舉ゲス
又鎌槍ト云フ物由イカナル制ニヤ其止ル由
文ヲモ見テ又テシ事ハ推テ云フ
其名ニ叶ヒタル槍當國年婁郡熊野新宮神

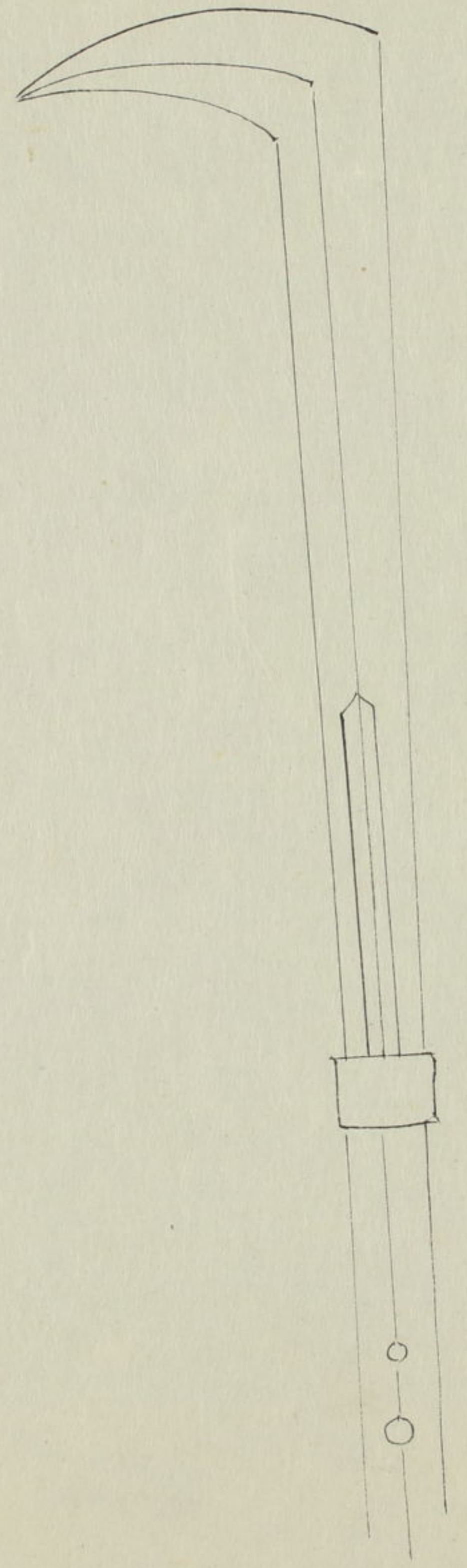
倉^{クラ}其神室^{ミヤ}アリ所^{トコロ}御物^{ミツモノ}神人社僧^{カミヤノヒコ}ノ詞^{コト}
ハ^ハ鑰^{カギ}鑰^{カギ}ト云^{イハレ}ヒナ^ナラ^ラハ^ハ此^{コノ}物^{モノ}ヲ見^ミシ^シ度^{タク}アリシ^シ
腔^{クハ}甲^カガ^ガ子^コノ^ノ上^ノヨ^ヨリ^リホ^ホコ^コ先^ママ^マ長^{ナガ}サ^サ一^{ヒト}尺^{シユ}一^{ヒト}寸^{サツ}
以^モ人^{ヒト}廣^{ヒロ}キ^キコト^ト一^{ヒト}寸^{サツ}一^{ヒト}分^{ブン}ヲ^ヲ相^{アヒ}半^{ハジメ}シ^シテ^テ其^{ソノ}中^{ナカ}ヲ^ヲ通^ス
リ^リ脊^{セキ}ア^アカ^カテ^テ兩^ニ又^{マタ}又^{マタ}施^セセ^セリ^リ前^{マエ}後^{ノチ}ノ^ノ面^{オモテ}片^{カタ}カ^カタ^タハ
小^コ鈕^{ニウ}ノ^ノ形^{カタ}ヲ^ヲ陽^{ヨウ}文^{モン}ニ^ニ鑄^コテ^テ片^{カタ}カ^カタ^タハ^ハ隱^{カクレ}起^テシ^シテ^テ
ア^アラ^ラハ^ハシ^シ谷^ヤ長^{ナガ}キ^キ壹^{ヒト}寸^{サツ}八^{ハチ}分^{ブン}餘^{ヨリ}隱^{カクレ}起^テハ^ハ則^{スレバ}隱^{カクレ}文^{モン}
ニ^ニシ^シテ^テ今^{イマ}ノ^ノ人^{ヒト}ノ^ノ人^{ヒト}ノ^ノ通^スル^ルヲ^ヲ如^{トシ}キ^キス^スナ^ナ也^也ナ^ナコ^コ先^マ
ハ^ハ鑰^{カギ}ト^ト云^{イハレ}フ^フ物^{モノ}ノ^ノ如^{トシ}ク^ク勾^{カマ}レ^レリ^リ此^{コノ}物^{モノ}ヲ^ヲ兩^ニ刃^ヤナ^ナリ

脊^{セキ}モ^モアリ^リテ^テ勾^{カマ}リ^リ夕^タ陽^{ヨウ}内^{ウチ}ノ^ノ口^{クチ}外^{ソト}ハ^ハ方^{カタ}也^也
勾^{カマ}レ^レル^ル如^{トシ}ク^ク後^{ノチ}ヨ^ヨリ^リ末^{ハシ}至^キリ^リ長^{ナガ}サ^サ四^ヨ寸^{サツ}二^ニ
分^{ブン}廣^{ヒロ}サ^サノ^ノ身^ミノ^ノ如^{トシ}ク^ク其^{ソノ}銳^{サキ}ハ^ハ鴨^{カモ}ノ^ノ嘴^{クビ}ノ^ノ如^{トシ}ク^ク稍^ヤ下^カ
ニ^ニ勾^{カマ}レ^レリ^リ心^{ココロ}ノ^ノ長^{ナガ}サ^サ一^{ヒト}尺^{シユ}二^ニ寸^{サツ}二^ニ分^{ブン}目^メ貫^{クワン}ノ^ノ穴^{アナ}ニ^ニ
アリ^リ圖^ズハ^ハ後^{ノチ}書^{カケ}シ^シテ^テ此^{コノ}物^{モノ}ノ^ノ疑^{ウタガハシ}ス^ス處^{トコロ}モ^モナ^ナ
キ^キ上^ノ代^{カタ}ノ^ノモ^モト^ト見^ミエ^エケ^ケル^ルサ^サレ^レト^トモ^モナ^ナリ^リ
鎌^{カマ}槍^{ササ}ナ^ナリ^リト^ト云^{イハレ}フ^フ兩^ニ又^{マタ}ス^スル^ルト^トシ^シテ^テ物^{モノ}ナ^ナ
レ^レハ^ハ彼^{カノ}軍^{イクサ}所^{トコロ}令^シノ^ノ義^ギ解^{トク}ヲ^ヲ引^ヒ給^{ケル}ニ^ニテ^テ本^{ホノ}ノ^ノ兩^ニ頭^{カビ}ト^ト
キ^キ物^{モノ}ト^ト云^{イハレ}フ^フサ^サレ^レヌ^ヌハ^ハ又^{マタ}ヲ^ヲ施^セシ^シ物^{モノ}ト^トモ^モ見^ミ

エスト注シ給フウエハ^{ナラ}准ヘテ云ニ事モイカ
カ有一キ然レトモ此槍ト云フ物モ儀伏軍器
ノ^ナツノ名ハアリテ其^ナ実ハ^ツツナルモシラス既
ニ儀式^真現ト云フ書ニハ^年人等應天門外
左右^分陣シ執^ホ槍ノ座ノ^胡床ニ並ブト見
エタリハ元正朝賀ノ式ナレハ儀伏ト云シニ
夕^儀ヒ侍ラシ宮衛令ノ義解ニ見エシゴトク
祀容ニ用フルヲ儀伏ト云ヒ征伐ニ用フルヲ
軍器ト云フ即実又同クシテ^踊ヲ殊ニスル者

也ト云フ時ハ槍ト云フ物儀伏ニモ軍器ニモ
用フヘキ^欽カク之フ時ハ^證文ニ引給フ所ノ
本ノ^両頭銃^ノ下^義解ニ注^各レハ又^又施
セシ物トモ見エスト書サレシ詞ヲイカニト
カセ^ン敢テ思フニ^軍防令ニ見エタリ^弄槍ノ
ホコノ^更ハ^衛士下^番ノ日ハ^今ノ世ニスナル
如ク^弄槍ヲ^教一^習フ久クハ^儀事ニ^一此^義解
本^今兩^頭銃^キ者ト注サレテ^儀伏ト^軍器ト亦
戦^闘ノ^ワサヲ^習フ時ハ^弄槍ノ^小コハ^本ニテ

制り外物ナル事ヲ別々ナリトシテ
 軍所令ニ依リテ三槍ノ名ハ大ノ漢
 三ノ儀ハ漢習ノ儀トシテ用ルル
 元作レルルトシテ決意ナリトシテ
 錦槍ノ尾ノ槍トシテ又ハ南無ノ
 別々ニシテ證トシテ
 引キ用ヒシ事ハカクテ此ニ云ヒシ
 並ノ古物ハ軍使ニ用テハ錦槍ノ
 類トシテ明カナリトシテ思ヒ知ラ
 馬ノ心ハ別々ニシテ別々ニシテ



卷八 劔 双 類

カフツキノタチ
頭 槌 劔

軍器考曰筑紫彦山ニテ地中ヨリ掘リ得レ太刀
 アリ武内大臣ノ物ニヤ太刀ノ頭ノ飾槌ノヤウ

ニナニアルト云ヒシ人アリモシ其言ノ如ク
ナラニニハソレヲ頭槌ノ太刀ナトイフ物ノ制
ニヤ武内ノ物ノ製
按スルニ今コノ書ヲ読テ彦山ニ握得シ太刀
ハ武内大臣ノ物ナラニカレトモ又頭槌釵ナ
ト云シ物カトモ思ヒ合スル製アリ享保甲寅
ノ夏ノ比高カオ雄山神護寺ノ宝物ヲ見シ中カニ
應神天皇ノ御釵トテ見奉ルニ今ノ世見モナ
レヌ制リニテ制ハ何本トモ見エテ今俗ニ云

フ左リカキト云シカ如ク刻ミタルニ紫銅ノ
如キカ子ヲ細葛ノ様ニ人トテ彼キサニ外ル
鞘ヲ卷シ物ナリ其釵ト云フ物ハ鞘ノ口ヨリ
ニ寸許カタケアガリサヒニマトハレテコイグ
チト云フ処ノ出入モナラ子バ又ノ様ハ見ル
製ヲ得ス又鐔ト云フ物モ又ヨリ一ツカ子ニシテ
フクラカニ鑄ツケテ其形ヲ成シ猶柄モ頭
モ同シカ子ニテ手ヲシテ握ル処ハホソク頭
ハママトニ槌ノ如クニソ有ケルサラハ頭カ槌

釵ナトモ云シニイタク疎ナルコトモアルマ
シキニヤ彦山ニテ掘出セシモ武内大臣ノ物
ナリト云セ見シ所ノ釵モ應神帝ノ御物ト聞
クニソノ時代ノ制同シ物ニモヤト彦山ノ太
刀イヨイヨ見セリコソホシケレ

二 釵太刀

軍器考曰釵太刀ハ節會御禊行幸供奉ノ公卿臨
時ノ祭ノ使等ニ是ヲハキ給フ物ニヤ古ノ物大
略本ニテ作レル物ト見エタレ

按スルニ飾抄ヲ引キ釵釵ノ説ヲナシ給フト
テ古ノ物大略本ニテ作レル物ト見エタル
由ヲ注サレ木ニテ作レルトハ鞘ハモトヨリ
木ニテ作レハ此物ノ更ニテハアラシサラハ
又ノ木カナルヲ云フニヤト猶ウタカハシケ
レハ飾抄ヲ披キ見ルニ釵釵ノ篇嘉祥元年ノ
次ノ文ニ見エタルハ又曰古物釵釵大略本
云云コノ本地トアルハマカフベクモ無キ鞘
ノ更ナリト己ハマトモ晴ヲト思ハト本地

真大扱
接木地ノ地ノ幸ノ土偏ヲ
以テ木也ト書キシ一本アリ
シヲ見テ木ニテ作レルト
思語ナルニト云考り是
見似タルニテテテ

ヲ木ニテ作レルト書セシ謄抄ノ一本モアル
ニヤ尋ヌヘキ事ナリ

大太刀

軍器考曰又後代ニ至テ大太刀ト云フ物見エタ
リ富山莊司次郎重忠カ備前作ノカウヒラト云
大刀ハ平四寸長サ三尺九寸ナルヲタニ
其地ハ殊ニスクレタル物トイヒシニ元弘建武
ノ後ハ五尺六尺ニ及フ太刀イクラモ出来ケル
按スルニ吾國大太刀ノ始リシ事ハカクコソ

ハ右ケノ是ハタニ武用ナレハイト耳ヲ
モ驚シツハシ又征器ニハアラ子ト長キ太刀
ノ延喜伊勢太神宮式ニ見エタル玉纏横刀ト
云フ物ハ三尺六寸トシルサル又戦ニ用ヒレコ
トヲ長府平家物語ニ見ル所十郎藏人行家常
陸坊トタハカハレシ時片手ニハ野太刀片手
ニハ小太刀ヲ持テ挑ミアラリハレシ其野太
刀ト云フ物ハ三尺五寸トコソ見エタレ富山
重忠ノ大太刀ニ長キ是四寸許ハヲトリタレ

ト是等モ実ニ闘戦ニ用ヒ猶又ソノ此モ同シ
キナレハ大太刀トモ云ニ近カルヘシ抑異
朝刀劔ノ制ノ長キ物ハ古今カ劔録ニ見エラ
夏王孔申ノ牛首山ノ鐵ヲ採テ鑄給ヒテ夾ト
銘セラレシ劔ハ長サ四尺一寸サハイト此
尺ヲ周尺ニテ見シハ長劔ニ等ク云ニモイ
カナルヘキサレトモ夏尺ハ詳カナラスト
モイハレハ暫シルシツケヌ又齊高帝ノ建元
二年ニ造ラレシ定業ノ劔ハ五尺ナリ又後燕

ノ建興元年ニ二刀ヲ造リ一雄一雌ト名ツケ
ラレテ其一カヲ別チ置ケル必ス鳴ト云フ事
ノアリシハ七尺ノ太刀也猶モ大劔ト號シテ
長サ一丈一尺ニ造レリシハ蜀ノ後主延熙二
年ノ制ナリコレラ或ハ身ノ護リトシ或ハ山
ニ蔵リ川ニ投シテ其地ヲ鎮メシ物トコソ見
ユルナレ我神國ノ長劔矣ニ神代ヨリ始リシ
夏ノ常陸國ニ坐麻島ノ社ノ御正體スナハ
ナコトテ飾靈^{フツノミタマ}庫^{ホノタカ}劔^{ノ高}ニシテ今ノ也ニモ窮^{カキ}

リナク鎮リマス比長サノ御正幹ノ更ハソノ
大宮ツカサニ受傳フル処アルト畏ケレハ白^{アカラ}
地^サモ思ヒメダラシトサテヤシヌ昔ヨリ神
宝ニ備ヘンガタメニ進^{タマツ}レル大太刀又近キ也
モ新ナル制アリ古代ノ物トテ見シ事ノアル
カ中ニ武士ノ力戦ニ用ヒシ物トモ云ヒ傳ヘ
テ神社佛閣ノ什物ニモ多カレトタシカナル
證ヲ求メ得ヌハ古ノ遺^イモラシヌ
木カ^キ

軍器考曰豊臣太閤ノ朝鮮ヲ侵サレシ更テ彼國
人人ノシルセル物ニ大同江ト云フ大ナル江ヲ
隔テ見ルニ我朝ノ兵皆大ナル太刀ヲ肩ニカケ
タルカ目ノ光リニカ、ヤキテ電ノ如クニ見え
ケリ或ハマコトノ太刀ニハアラズ木ヲモテ作
レルニ白鐵^{ロウ}ト云フ物ヲリ、キテ人ノ目ヲ眩^{マキユ}サ
センタメ也トイフト見エタリ^{燈籠ニハシメハ心}
得ヌ更ニ思ヒシニ後ニ我朝ノ人ノ其時ノ更テ
シルセル物ヲ見ルニマコトニ彼國ノ人イヒコ

ノ

トク其コロハ木ニテ五尺六尺ハカリノ太刀
コシラヘテ佩タリ其木カヲハムカシ箆ナト負
シヤウニホロトヲ肩ニカケテ負ヒケリ
ニムカシニモ大太刀ヲバカク負シ夏モアリキハ
シメ大太刀トイフ物ノ出来シヲ夕ニ心アル人
ハ世ノ親ニタリヌルヨトイヒケル
水ニテ作レル物ヲヤ他ノ國ニ識リノコセシ夏
口惜キ事ナリ
按スルニ大太刀ノ次ヲ木刀ノ大太刀ノ夏ヲ

ノ

アゲラレ我朝ノ人木刀ヲ作りテ佩ル事ハ他
ノ國ニ識リノコセシ夏ニ給ヘル
サレトモ大太刀ノ佩テ渡リシ我國ノ人ノ木
刀ナリシ事ノ惣秘録ニ見ル処ニ遠クシテ
辨ラ一カラスト書シタレハ其木刀ノ真偽ナ
タカナラスト云フ意ニモアル一シ猶マク同
書ニ提督李如松カ徒ト我朝ノ師ト礪石嶺ノ
戦ニ提督カ兵皆北騎ハカリニシテ火器ヲ
モ持ス短キ劔ノシカモ鈍キヲ以テ我國ノ人

ハカチタチニテ各三四尺ノ大劔殊ニ精利類
ヒナキヲ以テ施シ振舞ハコレニ突關左右ノ
人馬皆ウチ靡サレテ敢テ其ホコサキニ當ル
者ナレト書セシヲ條ニ見レハ大同江ノ木刀
モ強チ欺キ嘲弄セシ事トモ見エズサレドモ
荀子カ兵論ヲ思ヒ給ル高説ニテモ有ラン
ナレハ其木カラ佩用フル夏ノヨシ欽アシカ
ノ程ハイカテカ心得ワクハキサハイト異
朝ノ昔モ木刀ノ見エシ事ハ礼書ニ春秋傳ヲ

引テ古者車僕勇カノ士劔ヲ帶フ其冕弁ヲ服
テ以テ礼ヲ行フ者ハ佩玉ノミ奈始皇ニ至テ
大ナハチ冕ヲカウフリ劔ヲ帶フ漢ノ礼ハ天
子ヨリ百官ニ及ヒ皆劔ノブ魏氏ハ唯朝服
ニコレヲ佩フ晋氏マタ木ヲモテ是ニ代フル
トモ見エ又ニ後実録及ヒ宋朝會要ヲ并セ考
フルニ後刀ハ晋ヨリ多シ唐遂ニ木ヲモテ是
ニ代ハ銀ニテ飾リテ威儀ニ備フト見エタリ
我朝木刀ノ古クヨリ見エレハ宗神天皇出雲

ノ大神宮ノ神宝ヲ見マク覺シメシケル時其
神宝ヲ掌シ出雲ノ振根ト云者其振根カテ筑紫
ノ國ニ往テ此命ニ過ス其弟飯入根皇命ヲ被
マイラセテ又二人ノ弟ヲシテ神宝ヲ覽セタ
テマツラシム兄振根筑紫ヨリカヘリ来リテ
神宝ヲ朝廷ニ進リテ事ヲ聞テ飯入根ヲニク
シ殺サシト思ヒ竊ニ木ノヲ作り夕クハ一テ
欺テ止屋ノ淵ノ妻ヲ見シテ弟飯入根ヲヒ
キテ淵ニ至リ其水ノ清冷ケレハ共ニ游泳セ

ニト云テ各カヲ解テ水中ニ沐スルニ兄マ
シ陸ニ上リテ弟ノ真カヲ佩ク弟驚テ兄ノ木
カヲ取テ共ニ相撃ニ弟ノ取リ佩シハ木カナ
ルカ工工ニ拔得スレテ殺サレタル事アリ又
神功皇后ノ御時武内宿禰武振熊ト計給ニテ
木カヲ佩テ忍熊王ヲ欺キセメウツテ遂ニ瀬田
ノ濟ニシテ忍熊王死給テ共ニ日又久治三年
ノ台記ニハ五月十三日列見ノ時外記康光陪
膳ノ間ニアヤマテ宰相中將教長卿ノ飯入

上^{ウラ}ニ居カ、リテ其劔ノ折レタリシモ木刀ノ
由トハ之フナレ又乎忠盛朝臣ノ銀薄ニテ夕
ミナル木刀ヲ紫宸殿ノ御後ニシテ宝殿ツカ
サニ預ケヲカレ時ノ難ヲモノガレ剩一君ノ
御感ヲモ被リ給ヒキ 平家物語サレトモ委シク念^{ヲモヒ}
ス時ハ出雲振根平忠盛等ノ木刀ハ其身バカ
リノ進退ニテ詐術シ又教長卿ノ事ハ後刀ナ
ルカ致ス所ナリカノ大同江ハ木刀モシ実ナ
ラハ武内宿祢ノ策ニ相似タル事ナルヘシカ

ノ昔朝ハ木刀ヲ帶テ其所ヲ得タリト云ハ一類
ニ或ハ本是ニ書ルサレシ大同江ニテ本朝ノ
人ノ木刀ヲ帶タリシ時モ委ク考フレハ彼江
ヲ渡リテ一夕ヒ乎壞ヲ乘取タレハ強テ他ッ
國ヲハツル事モアルマシキニヤサレハ和漢
木刀ヲ用ヒラレシ例ノ思ヒヨラスモ猶多カ
ラニ欽トガ覺ユル 想又ハ以テ其時
尾鞘 ハ 軍器考曰尻鞘トイフ物萬葉集ニハ劔後トカキ

大知乃志利左也トヨミタリ

下

按スルニ此條尻鞘ノ名コトコトク具ルト之

スヘシサレトモ見及タル処ノ尻鞘ノ名コト

ニ脱タル事ノ遺恨ナレハ次テシルスニ小豹

尻鞘ト云フモ見エタリ世俗淺深赤皮尻鞘

記弘尻鞘次將裝束抄蛇尾尻鞘信範唐皮尻鞘建武

記鰐形尻鞘左筆ノ尻鞘繪尻鞘見記ニ管但繪ノ尻

鞘ト云フ物ノ中ニ鰐形左筆同類ニシテ其鰐

形ト云フハ上級ノ鰐ヲ繪カキ地ハ布ノ皮ノ

貞丈按古記唐皮トアルハ皆虎皮ノ皮ナリ今世外國ヨリ渡来ル所ノ金草カハナドノ皮ニハアラス

文ヲ色トリ左人隨身是ヲ用ニ右ハ左筆ト云フト管見記ニハ見エタリ赤皮ノ尻鞘モ繪ノ

尻鞘ニ屬スノ管見記

サケヲ下緒

軍器考曰御刀鞘卷有下緒

按スルニ下緒ノ事サヤ卷ノ皮ニ付テクハ

載ラレタレド下緒ノ名ノミニシテ其ヤウハ

注シ給ハス此モノ武用ノ事ニアツカル品ハ

家々ノ説多カレドモソノ意巧マチマチナレ

貞丈按
延喜式曰凡衛府舍人刀緒左近衛雜地右近衛雜地左兵衛深線線左門部淺線右門部淺線細之云此刀緒ト云此下緒ノ皮ニ延喜式ニ刀子見タリ刀子ト云ハ根ナリ鞘卷即腰刀ナリ

貞丈様刀ノ下緒ハ平緒
ヨリ出シテト云ハイカ、
アルハキ太刀ノヲヒトリ
ヨリ出シモノトソイフキ
又延喜式ニカ緒見タレ
ハ本ヨリカニ緒アリ何
ヨリ出シト云フ更ニ成ル
ニモ及サル也

ハイカナナルヲカ是トセシコレヲ推テ思フ時
ハ其ミナモトハ平緒ト云フ物ヨリ出テ今ハ
其用タカヒヌルニコソサレハ布衣記ニハ北
面ノ侍サムラヒ龍口等太刀カタナ用ラレ様ヲ書シテ
次ニカハサヤ巻下緒鎌倉サゲヲナリアウガ
イ同シク鎌倉ト記セリ其カマクラ下緒ト云
フ物ノ圖ヲ見ルニ今ノ世ノ下緒ト云フ物ニ
ハイサ、カクガヒテ一方ノ端ニワナト云フ
物ノアル也実ノ物ニテモアルヘキヤ皆人モ

見ル処ノ物ニレバ今圖ニハ書サズ
カノ大カウ小カイノ觿クシナドイヒケル物ノ類ニシテ此物

軍器考曰次ニ髮搔トイフモノハ世田等ノ宗

刀ニサス事モナルキ俗ニテアル也大納言行成

御イマタ殿上人ニテオハシケル時実方中將

冠ウチ落サシテトサハカスニテ冠トリテカ

ウフリテマモリ刀ヨリカウカイヌキイテ髻ツ

クロヒシト云フ事寢覚記ニハ見エタリ武人ハ

貞丈極
操髮和名抄冠帽之
具見タリ冠帽之具
ニ列シタルニ付テ
考ヘシ

特ニ尋常ニ身ヲ放スマシキ故実アル事ナルヘシ
按スルニ此條髮搔ト算ト云フ物ニ心得テ文
字ニ世ニ通シ用フル事ヲ理給ヒナカラ根元
ハ同物同字ニ非スレテ後世其実ヲ大ニ異ナル
夏ヲモワカチ給ハスサレハ今之フ髮搔ノ用
ハ文字ノ見ユル如クカニカキシテ本字ハ
操^{レキ}髮^{ビシ}ナリコレヲ加^カ美^ミ賀^カ岐^キト之^ノ由^ヨ和^ワ名^ナ類^レ聚
抄ニ見ユタリ又算^{ケイ}ノ字ノ和名加^カ無^ム左^サ之^シト同
書ニアリテスルハ手^テ簪^{サシ}ノ類字ニシテソノ用

髮搔ト算ト格別ナリ簪ト之ニ算ト之フ物ハ
冠ノ中子ヲツラスキテ冠ヲ抱テ墜サハラン
ヤンカダノ人物ナリ又操髮ト之ニ俗ニ髮搔
ト之フ物ノ用ハ其鬢ヲ引ノ下テ理ル物ナレ
ハ其モチフル処ノ差ヒヌルヲ知リテ髮搔ノ
算字ニ算ノ字ハ用マシキ事ニヤサレハ髮搔ト
算字ト古代ノ随ニ用ケル様ニモ書シ給ヘシ
ハ後世夕マ夕マ文字ヲワケテ其用ヲワカツ
定ヲ知リヌル人ノ迷ヒモ出来シカトウタテ

持遠天...
火打袋 ウチフクロ

軍器考曰次ニ火打袋ハタル夏ハ昔 ヤマトタケクミコト 日本武尊東
夷ヲ平ケ給ヒシ始御姨 ヤマトヒメノミコト 倭姫命ノ天叢雲劔ニイ
ラセラレシニ其劔ニ錦ノ袋ヲソツケラレケル
尊相模國ニ至リ給フホトニ其國ノ夷等野ニ火
放チテ燒ウシナヒ マ イラセント謀リシニヨ
ヒテ叢雲劔自拔出ラモ モ 丑タル草ヲ薙ハラフ尊
彼錦ノ袋ヲヒラキ見給フニ其中ニ燧ヲイレヲ

カレタリケレハヤガテ石ノ稜 カド ヲトリテ火ヲ打
チ出し給ヒテヨナクヨリモ又火ヲ放チ給ヒシ
カハ風忽ニ起リテ猛火夷ノ方ニ吹オホヒテコ
トククニヤケホロヒヌ是ヨリシテ劔ヲハ草薙
劔ト名ツケラレ其野ノ燒ツメノ野トハイヒケ
ル 中 今ノ世マテ人ノ腰カヲ錦ノ赤皮ヲサゲテ
燧袋トイフ事ハ此故ナリケリト源平盛衰記ニ
ハ見タリ寛正ノ比ノ記ニ足利殿ノ御腰物ニモ
此物ツケラレシ事見エケリ 親元日記 織田殿ノ比

貞丈按
新千載集云親盛
アラ物ノ使ニテユクミ
カスノ女打ホクツミ
ツメニシテシフスリ
ノ袋ニ 敦忠
ウチツケニ思ヒイゾヤ
ト政卿ノ忍草ニテス
レルナリケリ
同上
万葉ニ須理夫久路火
打袋ナリ
後撰集ニアツママカリ
ケルニ 折々ニ
本女ニ見略之
同集ニ遠ヤ所マカリケ
ル友タチニヒウチニソテ
ツカハシケル此タヒモ我
ヲワスレヌ物ナラハ打見
シタヒ思ヒイテナシ

マラモ猶此物ノ夏見エケレド 安土日記 今ハカ、ル
物ツクル事ハ見エズ 中江 談抄ニ見エシ宝劔ノ
鞘ニ卷付ラレシ物 中ヨノ常ノ例ニハ アラス
按スルニ火打袋ハ日本武尊ノ時ニ始テ見エ
信長ノ大臣ノ此マテモ見エタレド今ハカ、
ル物ツクル事ハ見エズト注シ給フハマコト
ニ其説ノナハリタルニヤサレテ日本武尊ノ
此ヨリ元暦建久ノ間ハ年ノツイテモ遙ニ隔
リメレハ猶心モトナクテ其物ノ見エタル夏

同上
公忠集ニ井ナカヘケタル
人ニシセキフクアラア
キモノシテスリテヒウ
ナラソクテヤルトテ
ウチミテハ思ヒイテヨト
ワカヤトノシノフクサシ
テスレルナリケリ
此ウタオモヒニ火ヲヨ
セタリ

ヲ考フルニ延喜延長ノ程マテハ此モノ専ラ
用ヒシ事ニヤ後撰集 雜刑部 貫之ノ作歌アリ
ミチノクニマカリケル人ニ火ウチヲツ
カハストテカキツケ侍リケル
ヲリヲリニウチテタク火ノ烟アラハフ、口
サスガラシノベトゾオモフ
ト見エタルヲ為家卿抄ニサズガハ腰刀也燧
ヲツケタリトイヘリト注シ給ヘリ又舞樂書
圖ト云フ物左右ヲ別ラフ夕卷アリ其繪ノ中

貞丈之令世火打袋ノ台製也ト
 テ持傳タルヲ彼是見ルニ其製
 一様ナラス或人尺寸等合ノ繪画
 シモ色々ノ形アリテ一様ナラス
 後ニ至キ合製ノ繪画ニハ其形
 様ニ細長ニシテ雞卵ノ如ク兩
 眼ノ頭ヲ小ク丸ク白ク彩タ
 リ是兩眼ニクテテ付テレシ
 括リタルナルヘシ是上古ノ製
 ヲ家タルナルヘシ彼繪ニイテ
 ラモ画タルニ皆一様ノ形ナリ腰
 ノ結ニ付タリ青磁左工門カ
 火打袋ノ銀ヲ滑川工落シタ
 リシモカノ袋ノ口縁ニアリシ

採^{サイ}采^{シャウ}老^{ラウ}ト云フ舞ノ由立ヲ見レハ老翁ノ面
 ヲ被^{カフ}リ狩衣如キ物ヲ服テ腰ニハサスガト云
 一物ノ如キニ袋ヲ結ツケタルヲ火打袋トイ
 フ物ノヨシ伶人ノ家ニテハ傳ヘ云フ事ニソ
 有ケルサレトモ今云ヒシ物モ本文ニ注シ給
 ヒシ物モ共ニイカナル制ニヤトモ思ヒタド
 ラム便リモナキカサレハ近キ世モ此物ノ絶
 スシテ残リシ莫ノ知ラレタルハ宝永五年三
 月八日京都ニ火災ノ變アリ他所ノ行幸ニヨ

故ナルヘシ帝ノ袋ノ如クエ
 ニクチアラシニハ鉄落マシ
 キナリ

リテ宝劔モ由タリシニ火打袋ト云フ物トテ
 赤地ノ錦ニテ調ヘタル袋ヤウノ物ヲ宝劔ノ
 鞘ニ結付ラレタルヲハ覽給ヒタルトサハガ
 シカリシカハ白^{アカラサマ}地ニ見マイラセテ其袋ノ形
 ハ夕シカニサトリ給ハサリシトアル親王家
 ノ小話マシマシケル由ヲ聞シ莫アリサレト
 モ江訖抄ニ見エシ宝劔ノ鞘ニ卷ツケラレシ
 神璽ノ御簪ノ鑿ノ夕ケロニモヤト猶考ヘ見
 ルニ此鑿ハ宝劔ノ組ニ纏ヒコメラレシ物ト

見エタリ又彼言方ノ覽給ヒシハ正シク錦ノ
袋ナルコソ疑フ一リモナキ火打袋ナル一シ
コノ物モ口久世ニハ傳ラ子ト今ニ残リタレ
バイト目出タキサテモ其袋ト云フ物ノ圖ヲ
實之ノ歌ニ依セ見ルニ能カナヒタル物ト云
フ一キモアリ又ムノ藏シモテハヤス火打袋
ト云フ物ノ圖トテトリトリアルヲモアツメ
持タレド彼言ノ御説ヲロヲ口聞ルニハ聊カ
タガヒヌレハ像ヲハ書サス

軍器考 銃尾

軍器考曰菖蒲作ヲハ又銃尾トモ云フニヤ
按スルニコノ銃尾ト云フ名ハ肩槍ノ部ニモ
銃尾槍トアケラレテ其制ハイカニヤアルラ
ント注給フ此銃尾トイフノ名ハ増鏡ニ
見エテ三條宰相中將サ子モリモ召捕レ又三
條ノ家ニツタハリテ銃尾トカヤ云フ刀ノ有
テルヲ此中將日地モタレタリケルニテカノ
浅原自害シタリト見エタルハ正應三年二月

九

九日ノ事ニテリ有ケルノ文字ノ如ク造リ

ナシタル物ヲ云フニヤ

新巻九上甲曹類

軍器考曰昔ハ草ニテ作りタリケルヲ神功皇后

ノ新羅ウタセ給フ時武内宿禰ノハカフヒニテ

始テ鐵ヲモテ作ラレシナド世ニハイヒ傳ル

ニヤ此事國史ニハ見エス器中延曆九年三月太

宰府ニ仰ヒテ鐵ノ曹ニ千餘枚ヲ造ラレシハ

鐵ニテ造レル事ノ正シク見エシ處ナルヘシ

按スルニ武内宿禰ノハカラヒ造ラレシ鐵ノ

甲ノ意ハイヨイヨ見ル所ナシ鐵ニテ作レル

曹ハ桓武ノ御世ニ見エタル事ハ明カナリサ

レハ鐵ノ甲ノ制レル始ハイツノ比ヨリトハ

定メカタクレド仁明天皇ノ承和十一年ノ正

月ニ山城國ヨリ鐵甲一領ヲ上リシコトアリ

件ノ甲布袋ニ覆テ葛野川ニ流レ着トモフ事

ノ続日本後紀ニ見エタレハ其ツクリ初シ前

巻九

ノ事ハイカニ久シキ夏ニヤ有ケムモノアタ
リ見エシ所ハ鐵ノ曹作ラレシヨリ 後ナレト
ニ鐵甲ノ國史ニ見ル所ヲ書シス

同下

槍字

軍器考曰ツハモノ、戰場ニノソミテ矢石ノ中
ニ立ニハ弓ト銃トイツレカエラバンヤタトハ
鐵ノ十重^{トエハクニ}重^{ハクニ}カサ子タリトモ其透間ナカラザ
ランニハイカテ身ヲハ傷ラカスハキステニ透

間^ノ隙^ヲ突^クテ^ハ敵^ノ目^ヲ射^スコト^ヲコリ^ウカ^ハフ^ベク
レ^テ鎧^ヲウ^ケタ^シモノ^ニヒトリ^コノ^ニツ^ノ物^ニカ
キル^ハレ^ヤ太^カカ^ノ子^槍長^カ柄^{アリ}ニ^ハシ
按^ズル^ニハ^シ鎧^ノ條^ニア^ケラ^レテ^ハ軍^防令^ニ解
ハ^ズ槍^類鎌^ノ槍^ノ條^ニア^ケラ^レテ^ハ軍^防令^ニ解
ヲ^引テ^ハ木^ノ兩^頭銃^キ物^ナレ^バ又^テ施^セシ^物
トモ見^ユク^ト注^シ給^フコト^ハ此^條鎧^ヲ穿^テ
シ^モ今^ハ太^カカ^ノ子^槍長^カト^ハ行^キハ^具ニ^入セ
給^フ是^レイ^カナル^意ノ^ハ深^ク思^フニ^前ニ^注セ

シ変ヲ謂フモ 失セ給ヒタルニハアラン今俗ニ
用ナル所ノ鏡ノ字此槍ノ字ヲモテ改メカ
サセシメタメニ用ヒ給ヒシニゴソサレトモ以
前ノ注ヲ父ガ良スト人々ノ思ヒヨラムモ知
ズ也利ト之ノ文字ハ異朝ニ純制庫鎗ト之フ
物ノ我朝ノ也利ノ類ナレハ此條ノ槍ノ字
ヲモシカシ鎗ノ字ヲ用ヒ給ハムニハ
鳥帽子
軍器考曰武士ノ鳥帽子ハ猶ヤハラカナリシカ

ハ梨子打鳥帽子ナドモ之シナリ
ノクサ張リトテ物
ノコハカラスナリ
按スルニ武士ノ鳥帽子ハ猶ヤハラカナリシ
カハ梨子打エホシナト之ヒシト注シ給ヘハ
サニコソハ有ナン其鳥帽子ノヤハラカナリ
シユ一ニ梨子打ト云フト書サレテ其ヨル処
トテ衣服ニ梨子ヲ打ト之フ事ヲ引給ヘリ凡
鳥帽子ハ其名モ多カレト武用ニアラヌハ書
スニ及バ子トモ皆コレソノ調ヘシ処ノ弊ヲ

ハ梨子打鳥帽子ナドモ之シナリ
ノクサ張リトテ物
ノコハカラスナリ
按スルニ武士ノ鳥帽子ハ猶ヤハラカナリシ
カハ梨子打エホシナト之ヒシト注シ給ヘハ
サニコソハ有ナン其鳥帽子ノヤハラカナリ
シユ一ニ梨子打ト云フト書サレテ其ヨル処
トテ衣服ニ梨子ヲ打ト之フ事ヲ引給ヘリ凡
鳥帽子ハ其名モ多カレト武用ニアラヌハ書
スニ及バ子トモ皆コレソノ調ヘシ処ノ弊ヲ

負丈押サビ烏帽子ト云フ名
不審化ホレニサビナキハナシ
又梨子行ニ大小ノ品アリトテ
説モ如何此條サビエホレト云ヨ
リ以下尋キ事ニヤト云フヤ
テハ徳説ナルヘシ信シカタシ
ヤ梨子行エホレノ本製ヲ知ラ
サル故誤レルナルヘシ統世継
物語ニ昔ハエホレコバクナルニ
ナカリケルナルヘシ此比ソサ
ビエホウシキヲメキエホウシ折
カハリテ侍ルメレトアリ也
サビエホウシト云フハキラメキ
エホウシニ對シタル名ニテサビ
ナク滑キ光リアルヲキラメ
キエホウシトイヒ昔ヨリ有所
ノサビ有光ラサルヤウニヌリ
タルヲサビエホウシトイヒシ
ナルヘシ大サビ柳サビエホドノ
サビノ変ニテアルナリカノ物
語ノサビエホウシト云ハ其比
ノ俗言ニテ本式ノ変ニテアラ
サルナリサビナクナメラカ
ナルモノ出来シ時ノ俗言ナリ右代ハオノツカラモメテレハノサタルヲ其レハサビト云シナルヘシ後ニカタク件ルニモ昔ノレハヲマ子テ

取テ名ツケル故ニ引立エホウシト云モノ別ニアリ引立烏帽子エホシラ堅クヌリタルセニ至テ此名ノエホシノ柔ナルヲサレテ言詞ナリ接烏帽子或ハ
キラメキ烏帽子等ノ名アリ又サビ烏帽子ナ
ド之フ物ノ中ニモ柳サビト云フ物ハ假令添
ヲモテ是安説ニ柳行季ノ如クサビラスル也柳ノ木ハ夕ノ様ニヌリ又本文ニ見エ
シ梨子打ト云フ烏帽子ハ是安説ナリ塗綴ノ梨子肌ノコ
トク俗ニシホノアラ、カナルヲ大梨子打ト
云ヒコマカナルハ小梨子打ト云フトゾヤハ
ラカナルヲ梨子打烏帽子ト云フ変ハイマダ
知ラス尋ヌハキ良ニヤサテモ奉服ノヤハラ

ワザト木形ニテサロラツクルナリ

カナルヲ梨子ヲ打ツト云フ事コレモイサ、
カ名目ハ夕ガヒヌルカ其実ハ一ツコトナルベ
ケレド打梨子トコソイハメコレラノコトハ
イブカシク思フ事モアリテ年比古キ書ナト
ヲモ尋サグリ猶近キコロ前権大納言公澄卿
滋野ノ教一給ヒシ事ヲ承リテ其疑モトケヌ
井殿 彼衣服ノヤハラカナルヲ梨子ヲ打ツト云フ
事ハシラ子ド打梨子ト云フ名ノ見エタルハ
雨雪之間依ニ打梨子取寄装束下於殿下直廬可着

東鑑卷五上弘長三年癸亥
四月十日癸亥三所御參詣中
畧述江三郎左五門尉申左後卿
監進奉一上可令供奉雖論
不詳進趨之間打梨子走有悻
叙

貞文曰ナレト云フハナヤレノ
中畧語也梨子ハ假字也五ホ
ウレノナレト打衣服ノウケナレ
同意也差別ナレ共理カハル
レト云ハ語ナリ
打ナラレト云云又ニテハナレウ
ナナヤレト云フコトナリ
貞文抄

吉部秘訓抄曰味右所兼被
談云於放生會者身々打梨
共人結搦放人定也
又五節之前條曰定家御次將
蓑束抄同文月夜束帶打
梨

又假令於里亭見火條曰見上
如此之時頗可着尋常之服
打梨之條似不知故實云次
將蓑束抄同文吉部秘訓
文曰假令於里亭見火ノ
条亦同
御室守覺法親王之御作叙
氏往來白非打花之條為

仁安三年 養元三年十二月廿五日東宮御元
過味記

服昔人衣服打梨今人裝束如水 明月記

ハ正治二年八月十六日參上御堂無程御輿出

御予資家國行信光騎馬候供奉 布衣打又文保

二年二月廿一日ノ公敏卿ノ記ニモ此直衣志

年秋雨中初着給之間如法打梨子トコリ見工

夕レ打梨子トハ打ナラレト云フ意ナルガ工

工ニヤハラカナル 夏ヲ云フナレハ烏帽子ノ

梨子打ト衣服ノ梨子打トハ其理モカハル

キニヤハカナル外衣服ヲ打ナレト之例ハアマタ

見ル処モアハ也 梨子打烏帽子ハ始リタル地

ヲハ尋子極ノ夕キ事ニソ有ケル

鏡直垂

軍器考曰鏡直垂トイフ物古代ニハ聞ユス

言朝臣又定墨卿由答 禮ニ

各知リ給ハサル

按スルニ永福卿故高倉前權太納亮言朝臣

左工門督殿定基卿故野宮權中納亮此條鏡直垂

ナルハレ

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

ト云フ物始メ古代ニハ聞ユスト注サレ又

貞丈按直垂ハ武家ノ着始
ケル物也ト云ハ不替ノ説也
公家武家トハカレタル頼朝
以來ノ事之直垂ハ頼朝以前
ヨリ有レトモ云モ不替ノ首
書在ニ注スルヲ以テ考ヘレ

永福、御竟言朝臣定基、御_ニ關_ニ給_ト各知
給_ハハル由答_ラルト載_ラタレハ猶_モ給_レテ
之_ハ所_ニア_ラズサレトモ直垂_ハ武家ノ着_ハハ_シメケ
ノ事ヲ或人ノ説_ニ直垂_ハ武家ノ着_ハハ_シメケ
ル物也ト云_レシ事ヲサモアリナ_リカレト思
コ合スル事モアレト夕_レカナル記文ナド見
モ聞_モセサレハ_ハ介_ニト云_フキナ_リ然
ハアレト直垂_ハト云_フ物ノ用_ハラ_レシ_レ微_トセ
ニ事ヲ考_{フル}ニ其_モト女子ノ服_ニシテ又男

貞丈按直垂ハ久シキ世ヨリ
有_リケル物ノカ_レト云_フ見_カ
家集_ニ
アルヒタ_レシヤセントアナルウラ
ヲナ_ンウシナヒタルト云_フナ_リ
住吉ノキレトモイハテシラナ
ミカナ_ナア_リト云_フウラ_ハナ_リ
トモ
此歌コト書_ラ見_レハ直垂_ハ久_シ
キ物ナ_リ忠見_ハ拾_テ集_ノ作者
三_ノ天曆_年中_ノ人_也云_フ云_フハ二
百年_カリ昔_ニテアルナ_リ
貞丈按
直垂_ハ履_服ナル事_ハ宇治拾
遺_卷一_ノ村_仁イ_モカ_エノ_章三_ノ明_ニ
見_タリ然_レハ履_服ノ直垂_ト履
服_ノ直垂_トハ元_來同_名異_物
也其_考別_ニ記_ス又履_服ノ直
垂_{女子}ノ_ニ限_ラス男_子モ
用_セナ_リ

女共ニ用_{フル}処_ハカナ_ラス履_服ナ_リ久安五
年十一月ノ兵範記二十一日己丑今日被_レ行_故
姫宮周閑御法_支於_ニ上御門殿_堂中_ニ布施_ニ裘_各
正_北五_正鈍色_ニ装束_{織物}直垂_故宮_御手_筥一_合同_ト
見_エタルコリ女子ノ用_コタル_例シナ_ラムカ
又五葉_ニ攝_政殿ノ長女_入内ノ事ヲ記_サレテ
自_本安_内藏_寮御_衾紅色_御直垂_等中_先着_紅御
直垂_{其上}奉_着御_衾下_見工_猶其_例ハ五葉_ニモツ
フサ_ニ書_サレタ_リ今_此ニ_鑑直垂_ノ更_ニツイ

テ尋常ノ直衣ノ事ヲ理タルハ是ソノ本ヲ知
ラサレバ未ノ必スマヨヘルナラヒト其ノマ
ドヒテ晴ケム補ヒニハ便宜コトモアラニカ
コトクタクタク書シヌサレハ鏡直垂ト之
フ物コソ古クハ見エ子ドモ直垂ノ名ハイニ
シヘヨリ見エタレハ高倉殿永福山科殿亮言
ノ知り給ヌヘキ事ハ世ノ人モ思ハニ所ナリ
殊ニ長亭親長卿記元年九月十二日將軍源義尚卿佐々
木ヲ退給セムガタノ江州ニ向ハル其時進登

給ヒシ公家ノ人々ハ高倉殿藤中納言入道常祐
俗名永継鏡直日野政資朝臣鶴丸縫物鏡直垂諸大
夫二人各着鏡直垂高倉永康朝臣龍膽丸縫日野別流守光物鏡直垂
鏡直垂冬光日谷召具軍兵ト権大納言親長卿ノ
記シ給フヲ見ルニ冬光鳥丸守光廣橋政資朝
臣日野藤中納言殿永康朝臣ハ共ニ高倉殿ナ
シハシコレヲハ公家ノ人々モ戰場直垂ノ
テ鏡直垂ヲ用ヒ給トシタリニモヤアハラ
ム是ヨリ前觀應三年二月任宣行幸ニ
公卿以下鏡直垂着用事蘭大曆ニ見 其中高

倉家モ鎧直垂ヲ着給ヒシカハ此物知サル由
ヲ答一給ヒシ事ハイカナル故ニカ又野宮殿
定基ハ其時ノ有識トカヤ羨レハ鎧直垂ノ遠
近サノアリナレハ何ソ考ヘ置キ給ハサテ
ムヤ而モ直垂ト之フ名ヲタテ解キ給ハス事
何レモイソレモ深キ所以ヨリ有リケル也
卷十一 帷幕類
敷皮
軍器考曰敷皮席ノ夏毛ヲ用フ皮ノ長サ三尺二

寸廣サ二尺五寸白毛ヲスルシ残シテキル也上
ヲ櫛形亦ハ櫛上ナド云ヒ下夕白毛トイフ也
按スルニ敷皮ノ式ハ小笠原家ノ説ニモ等シ
クシテ近キ世ニ定レル事歟サレハ其木根ノ
扱ル所ヲモ注シ給ハ子ハ其始トスルニ便リ
アル事ヲ考フルニ彦火火出見尊海神ノ宮ニ
入給フトキ豊玉彦ミツカヲ迎フマイラセシ
海驢皮ハ重ヲ敷テ其ウレシ坐タテマツラシ
ムル上之ヲ事ノ見エタレハ
書紀コレヲヤ敷

卷十一

皮ノ起ル所ヲ執ニ更亦タガフマシキカソノ
用ヒシ処ノ海驢皮ト云フ物ハイカナル毛類
ニヤト云フ事ハ別タ子ト思ヒソクラスルニ
今云フ阿之加ト云フ物ナルハ此物吾カ紀陽
日高郡エナシヤウ衣奈莊ノ西南ノ海中ニ阿之加島ト云
嶋アリ其地カト云フモノ年ゴトノ秋ノ
コトヨリ冬ニ至リ多ク氷結テ彼島ノ岩上ニ
卧テ睡リ居ルナリ其大ナルモノハ長キ事一
丈ハカリ定ハナクテ鳥ノ水カキト云ハシガ

如キ物アリ性トシテ寝テハサムル事遅キユ
且其眠ノウチニ人ニ得ラレン事ヲ懼レテ等
類ノ中ニ一ツハ必ス子ムラズシテ溜ユク船
ヲモアヤシミ守リ船進ツケハ皆ミナ海ニ沉
リ又浮ヒナカラモ能寝ルト云フ其テイヲ詠
給ヒヌルカ夫木抄ヲ見ルニ建長八年ノ百首
ノ內衣笠内大臣ノ
ワガ戀ハ海驢ノ子ナガレサメヤラス勞ナリ
ナガラタヘヤハテナム

貞丈按
和名抄云華麻本朝式云
華麻皮_{註云和名阿之加リ}
見テ陸奥出羽交易雜物
中矣本文未詳

ト詠給ヒシヲ時ノ判者光勝朝臣ニテ判ノ詞
ニモ海驢マツ何トモ得ヨミトキ侍ラズトア
リ和名抄ニハ華麻_{アシカ}ト云フ物見エテイマタ詳
ナラス由ヲシルセリ又本州細目_書驢_{ウサキウマ}ノ集解ノ
時珍カ説ニハ東海ノ島ノ中ニ海驢出ツ能ク
氷ニ入テ濡ズト見ユ猶又山東志ニハ海驢文
登海中ニ出ツ狀驛ノ如ク秋丹島ニ登リテ子
ヲ産テソダツル也皮ハ兩ノ具ニツクル氷モ
潤変アタハスト見エタル物コソ南紀ニ在テ

俗呼テ阿之加ト云物ハ是コノ海驢ト云フ
物ナルヘシ其地_{ト云}用フル_{ト云}延ノ文字モ古クハ
海馬ノ字ヲ書タル由疑フラクハ盧ノ一_片ヲ
脱シ謬テ馬ノ字ノ一_片ハカリヲ用ヒ来リシ
ナラム今ノ士ニハ人々ノ才覺ニヨリサマサ
マノ異字ヲ用ヒ效スルハ其_實ニ遠カカラシ
事ノウタテクエノ覺エ由又此物西國ノ方ニ
モ見エル物ナリ因_テ其_所コ_ノ尋_ルニ或
人ノ説ニ正徳年中朝鮮人幣ヲサケテ江城

三来リシ時一良醫アリテ其カト云フ物ノ
性質ヲ語リ又異國ノ人ナルカタチヲ尋ケルハ
彼國ニ海麻ト云フ物ノ由答ヘタリキ海麻イ
マ読テ阿麻ニ加ナリ是ヲ略シテ阿ニ加ト云
フカト語ラレテ又聞シ此畧訓太タアチハフ
ベキ事ニヤ猶又和名抄ニ本朝式ヲ引ケル処
陸奥出羽等唐國ヨリ交易スル葦廉ハ其物ヲ
闕テ名ノミ殘リ西南ノ海中ヨリ出ル海駟ハ
其名ノ失テ物イマ在リ彼殘レル阿ニ加ノ名

物字上當有此字

ヲ是失ヒタル義知ニカウムラシムルユ一互
ニ詳ナラヌニヤサレハ内府ノ海駟ノ寢ナカ
レトヨミ給ヒタルヲ今ノ阿ニ加ノ子ナカレ
ニ併セ考フレハ此物ト云ニ聊ニタガヒ侍
ラニカク云一トモ物ヲ指テ別チ定メントス
ルニハアラス唯敷皮ノ始ヲ思ヒヨリテ書ス
ノミ

卷十二 鞍轡類

唐鞍

卷十二

貞丈按
 昔蒲形ノ銀面ト本文アレレ
 印板ノ軍器考ニ形字ノ
 下ニハ字ナシ飾抄ニ天仁
 或記ヲ引タル条ニ昔蒲形見
 エタリ其文ハ軍器考ニ見エ
 タレハ畧之

軍器考書曰古ノ馬ノ飾昔蒲形銀面雲珠頭珠頭
 總ハ子尾囊ハ其圖飾抄ニ見エケリマク和名抄
 ニ見エシ所モアルナリ茶筴狹斷ニ金鍔ハ馬冠
 也高廣各五寸上ニ三華形ノ如キモノ也トイフ
 更ヲ引テ今按スルニ俗ニイフ銀面ノ昔蒲形ニ
 レ也トゾ注シタル

按スルニ古ノ馬ノ飾ノ見エシ処鎔抄ニ載ス
 ル処トテ引給フ中カニ昔蒲形ノ銀面ト云フ物
 ノ圖ハ飾抄ヲ尋ヌレトモ見エスレテ其書ノ

貞丈按
 本文ニ頭珠ト云物ヲモ載ラレ
 ノリトセハ誤也印板ノ軍器
 考ニ頭珠ト云フ物見タリ
 頭珠ト云物見エス此郷カ
 見レ本ハ印板ノ本ニアラス
 シテ写本ニテ頭珠ヲ誤テ
 頭珠ト云タル本ナレハ

圖ノ中尾囊ト書シ傍ニ銀面私云銀面トバカ
 リ記シ給フサレハ此小書ノ如ク後ニ銀面ヲ
 因シ給ヒタル飾抄モアルニコソ尋ヌヘキ更
 ナリマタ頭珠ト云フ物ヲモ載ラレタレド此
 物モ普通ノ鎔抄ニハ見エズ鞍馬ノ具ヲ書セ
 シ物トモニモイマタ見アタラズ亦尋ヌヘシ
 茶筴狹斷ノ金鍔ハ馬冠也高廣各五寸ト書シ
 タレト狹斷ノ今ノ本ニハ四寸トモ見エケリ
 カノ金鍔ヲ銀面ノ昔蒲形也ト注セシモ和漢

ノ制相似テ異ナルナリ有ル陳祥道カ因セ
シ今駟ノ金鍔ハ馬ノ口ヲ除テ其ヲモテ掛
フサキ彼三萃形ト云レ物ハ鬣ヨリモ高クス
キ面ニハ眼ノ通スル処ヲ彫透セリ我國ノ銀
面ト云フ物モコレニ等シサレトモ其カタチ
上ハ廣ク下ハ狭シサレハ自然ニ其根ヲ限タ
リ凡吾朝ニ唐鞍ヲ用フル莫ハ蕃客來朝ノ用
ニ充ムカタメ設置カル、事式ニ見エタリソ
ノ外公卿殿上人ナトノ乗用ハ文物ヲ盛ニセ

シカタメ異朝ノ今駟ノ目サマシキ処ヲ好シ
テ用ヒ乘リシタメシナルハシカノ詩ニ言フ
倭駟孔阜ト見エタルモ此躡如キラ云フニヤ
猶モ次ノ文ニ唐鞍ノ具トモ擧フレタレハ鞍
ヨリ始ラ遺レル物ノ見ル処有ルハ下ニ書シ
又

同次文

軍器考曰其中唐鞍ノ具ハ餉抄ニ因セシ処モ盡
クレ備ハレリトモ見エス年中行軍ノ繪ニ飾

馬ヲ繪カキシヲ見テ其物ヲ想見ウヘケレト猶
サダカナラヌ事モアリ後ニ春日ノ社ニ詣テシ
ニ神殿ノ繪馬ニカキシ処ヲ見テ年比ノ疑トケ
ヌル事トモアリ今モ山科ノ神宝ノ中ニ其物ア
リナト云フ人アリシカト正シキ物ヲ見ルニ及
ハス

貞丈云唐鞞ト云フ鞞橋
ノ名ト思フハ誤也唐裝
束ニ飾ルヲ唐鞞ト云也
唐裝束ノ時ノ鞞橋ハ鉞
鞞ヲ用ル也諸鞞日記ヲ
考ヘシ愚考別ニ記ス

按スルニ唐鞞ノ具ハ飭抄又年中行事等ノ飾
馬ノ繪カキシ物ヲ併セ見給ヒテモ猶サタカ
ナラズト注シ給ヒシハサモコリハアリナニ

貞丈按
鞞橋由木橋ナルヘシ諸
鞞日記ニ見タリ物具裝
束抄ノ鞞橋ト同物ナ
ルヘシ
髮袋ハ諸鞞日記ニ見タ
ル角袋ノ更ナルヘシ

古キ書ヲ見ルニ一本ハ見エス物ハ一本
ニハ念ハカニ録セシモアリテ其中マタヲ口
ソカナル更モ多シ彼是ヲ併セ考ルニ此條ニ
漏ニ物ハ鈴唐鞞仁安元年ト云フ物モ見エ腹
鈴保安ノ藥袋康治ノ鞞長元髮袋同此外
ニモ見エシ物ハアレトモコトニハ略レヌ又
春日ノ社ニテ見給ヒシ神殿ノ飾馬ヲ繪ハ摸
留テ持タレハ今ノ度ナラ併セ見ルニ此物コ
ソクハシク備レリトハ見ユレトモ畫圖ノ見

ワキカタキ事コソ多カルソレカ中ニ杏葉ト之
フ物ヲハ熊野ノ飛鳥ノ社ニテ正レキ物神宝
ニ在リテ其因モ又書シ置ス此社ニコソ古一
ヨリ唐鞆ノ皆具シタルハ有リタレト古代ノ
物ナレバ或ハ蟲ノタメ破フレ或ハ糸ニア
ルナル毎ニ物ニテテ損ハレ猶年月ノ行タ
マニ其物トモ見エヌコソナケカシケレ杏葉ハ
表ハ金網ニテ裏ハ赤地ノ錦ヲモテ張タリ其
形モ大小アリ數モマタ多カレバ彼是ヲ取ア

貞大曰移鞆ト云々
橋ノ名ニ非ス飾様ノ
名也此時ノ鞆橋ニ録
鞆ヲ用諸報日記ヲ
考レ思考カニ記ス

ソノ見ルニコソ其裏ノ赤地ノ錦ナル事ヲハ
知リヌサレハ唐鞆ト云フ物モ委ク見ル所ハ
スクレテ古キ代ノ物トハ見エナガラ思ヒメ
タテセハ移鞆ナドモ云フベキ物カ其橋ハ黒
ケレドモ下地ノスレテ赤キ漆ノアラハレタ
ルハ漆ツクル様ノカクノ如キ習ヒニハアル
也ト或人ノ教フルモ定リタル事ニヤシレハ
黒移鞆ナト云フニハイカバアルベキ

同次文

軍器考曰又飭抄ノ唐鞞ノ下ニ昔シ徳大寺ノ唐
鞞ヲコフテコレヲウツスドイフ事アレハ移鞞
トイフモノハ唐鞞ノ摸シ作レルヲ云シニヤ
按スルニ昔徳大寺ノ唐鞞ヲコフテ摸シ作り
シト飭抄ニ見エタレバ移鞞トハイヒシニヤ
ト注シ給ヒシヲ何レモ云ナクテ見ルニハ昔
徳大寺ノ唐鞞ヲコフテ摸シ作りシヨリ移鞞
ト云フ名ハ出来リト思ヒカキマシニモ思
ハラシサレトモ其理ニテハアルカシキレバ

唐鞞ノ字ハ唐ノ鞞ニシテ
唐ノ鞞ハ唐ノ鞞ニシテ
唐ノ鞞ハ唐ノ鞞ニシテ

人々ヲ見惑ハサシト考フル処ヲシルスニ引
給フ処ノ飭抄ノ文字少シクタガヒアル歟一
本ノ飭抄ヲ見ルニ借請徳大寺ノ唐鞞写シト書
セリ此抄ニ徳大寺ノ唐鞞ヲ借請フテ写スト
見タル文意ハ彼書編集ノ時唐クテノ因ヲ繪
カ、ム料ニ借ヨセ写シ給ヒタルト云フ事ナ
ルヘシサレハ昔借写馬ノ謬リニナラヒテ昔
ト読給フカラニ徳大寺ノ唐鞞ヲ摸セシヨリ
移鞞ト云ヒシニヤト注シ給ヘリ勿論ウツシ

貞丈母移ノ録ハ唐書ヲ
移タルニアラシ脚幸録ノ
移ナルレシ諸報日記考ノ
シ恩考別ニ記ス移ハ模
ニハアラス轉移ノ義ナ
右貞丈首書ヲ加ス

ノ鞞ト云フハ唐鞞ノ移シタルベケレト總大
寺ノ唐鞞ヌケツセシヨリ移鞞ト云フヨト也
ノ人ノ思ヒヨラテ知ラズトカクハ注シツ
ケヌサレトモ昔ノ字借ノ字ニツガク子何レヲカ
用フベキ候セ想フニシカレ借ノ字ヲ用ヒシ
ニハ
軍器考餘大尾

寶曆十二年壬午冬十二月十九日

江府扈從隊平貞丈寫

